

三 木 市

平成 24~26 年度国庫補助事業による
発掘調査報告書

平成 27 年 3 月

三木市教育委員会

三木市

平成24～26年度国庫補助事業による
発掘調査報告書

平成27年3月

三木市教育委員会



跡部村山ノ下付城跡 T1 主郭北辺横堀土層断面（東から）



跡部村山ノ下付城跡 T2 落ち込み土層断面（南西から）



宿原城跡 T1 北辺堀土層断面（北西から）



宿原城跡 T2 北壁土層断面（南西から）



平井山ノ上付城跡 T 3 檜台状の土盛り上面全景（南西から）



平井山ノ上付城跡 T 5 断ち割り土層断面（北西から）



平井山ノ上付城跡 T 6 石列状遺構検出状況全景（西から）



平井山ノ上付城跡 T 6 北端断ち割り土層断面（西から）

序

兵庫県の播磨東端部に位置する三木市は、加古川より分かれ市内を東西に貫流する美嚢川の豊かな恵みにより、太古より多くの人々が生活を営み、特色ある歴史や文化を育んできました。

中でも、戦国時代に羽柴（豊臣）秀吉が三木城主別所長治を攻めた「三木合戦」は、全国的に有名な出来事です。

秀吉は、三木城の周囲を囲むように40余りの付城と多重土塁を築き、「三木の干し殺し」と呼ばれる足掛け2年にわたる兵糧攻めを行いました。今もなお、三木城をはじめとして、付城・多重土塁などの遺跡が市内の各所に残っています。

三木市は、平成18年度からこれら遺跡群の国史跡指定に向けて取り組み、平成25年3月27日、国史跡「三木城跡及び付城跡・土塁」として指定を受けました。また、翌年の平成26年にはNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が放映され、三木城が取り上げられたことから、全国的にも史跡の存在が広く知れ渡り、市外、県外から多くの方々が訪れられました。

私たちは、「三木合戦」が全国的に注目を浴びたことを契機に市内に残る貴重な歴史遺産を大切に後世に伝える必要性を切に感じています。

本書は、平成24～26年度に三木市が国・県の補助事業を受けて実施した跡部村山ノ下付城跡、宿原城跡、平井山ノ上付城跡の発掘調査成果をおさめています。

最後になりましたが、現地調査及び本書の作成にあたり、格段のご指導とご助言、ご協力をいただいた多くの関係者の皆様に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成27年3月

三木市教育長 松本 明紀

例　言

- 1 本書は、平成 24～26 年度国庫補助事業として、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、兵庫県三木市教育委員会が実施した市内遺跡の緊急調査・重要遺跡範囲確認調査・史跡内容確認調査の報告書である。本書では、跡部村山ノ下付城跡、宿原城跡、平井山ノ上付城跡、3 遺跡の調査成果を報告している。
- 2 整理作業及び報告書作成は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、三木市教育委員会が平成 26 年度に実施した。
- 3 調査主体：三木市教育委員会。各年度における調査体制は、次のとおりである。

平成 24 年度

〔事務局〕 教育長 松本明紀、教育部長 植原豊勝、文化スポーツ振興課長 松村正和、主査 廣井愛邦、主任 小網豊

〔調査担当〕 文化スポーツ振興課主事 金松誠

平成 25 年度

〔事務局〕 教育長 松本明紀、教育部長 山本公大、文化スポーツ振興課長 松村正和、主査 廣井愛邦

〔調査担当〕 文化スポーツ振興課主事 金松誠

平成 26 年度

〔事務局〕 教育長 松本明紀、教育部長 山本公大、文化スポーツ振興課長 松村正和、主査 廣井愛邦

〔調査担当〕 文化スポーツ振興課主事 金松誠

- 4 本書の編集は、金松誠がおこなった。執筆については、第 1 章・第 2 章は金松誠がおこなった。付載は、平成 18 年度三木城本丸跡の発掘調査（国庫補助事業）等で出土した動物遺存体の分析成果について、丸山真史氏（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）より玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。

- 5 遺物の実測は舟坂祐香がおこない、挿図のトレースは金松誠・赤松恵子・宮脇美佳江・舟坂祐香がおこなった。

- 6 遺物の写真撮影は金松誠がおこなった。動物遺存体の写真の一部は、丸山真史氏撮影のものを使用した。

- 7 本書に使用した地図は、三木市発行の 1/10000 及び 1/2500 都市計画図である。

- 8 本書における方位・座標はすべて世界測地系によるものを示す。方位は座標北を表し、レベル高はすべて海拔高（T. P.）を表す。

- 9 本書記載の遺物実測図の断面は、土師器－白、須恵器・須恵質系－黒、陶磁器－灰、鉄製品－斜線とした。

- 10 出土遺物及び図面・写真是三木市教育委員会において保管している。

- 11 確認調査及び整理作業にあたっては、下記の機関・諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

兵庫県教育委員会文化財課、跡部地区、平井地区、与呂木地区、石田高士、条一郎、藤原茂稔、神吉利雄、寺本興道、安隨俊明、今井正明、鈴木保、鈴木政治、高崎壽夫、田中通晴、向山久一、吉田雅茂、岡田章一、岡本一秀、山上雅弘、千種浩、西阪義雄、依藤保、宮田逸民、大村喬、広島市立中央図書館

目 次

卷頭図版

序

例言

第1章 平成24～26年度の国庫補助事業による発掘調査

　第1節 三木市の位置と環境 ······ ······ ······ ······ ······ ······ 1

　第2節 平成24～26年度の発掘調査 ······ ······ ······ ······ ······ 3

第2章 調査の成果

　第1節 跡部村山ノ下付城跡 ······ ······ ······ ······ ······ 5

　第2節 宿原城跡 ······ ······ ······ ······ ······ 14

　第3節 平井山ノ上付城跡 ······ ······ ······ ······ ······ 22

付載

　三木城跡及び付城跡から出土した動物遺存体 ······ ······ ······ 35

図版

抄録

挿図目次

図 1	平成24～26年度国庫補助事業による調査位置図	4
図 2	跡部村山ノ下付城跡 位置図	5
図 3	トレンチ配置図	6
図 4	T 1 平面・断面図	8
図 5	T 2 平面・断面図	9
図 6	T 3 平面・断面図	10
図 7	T 4 平面・断面図	11
図 8	出土遺物 (S=1/3)	13
図 9	宿原城跡 位置図	14
図10	宿原城復元図（明治期字眼図を基とし、昭和44年三木市都市計画図[S=1/2500]で補正のうえ作成）	15
図11	トレンチ配置図	17
図12	T 1 平面・断面図	18
図13	T 2 平面・断面図	19
図14	出土遺物 (S=1/3)	20
図15	平井山ノ上付城跡 位置図	22
図16	トレンチ配置図	23
図17	播磨平井山（「浅野文庫諸国古城之図」広島市立中央図書館蔵）	24
図18	主要部測量図	27
図19	T 1・2 平面・断面図	28
図20	T 3 平面・断面図	29
図21	T 4 平面・断面図	30
図22	T 5 平面・断面図	31
図23	T 6 平面・断面図	32
図24	T 6 石列状遺構 実測図	33
図25	出土遺物 (S=1/3)	34
図26	三木城跡・付城跡・多重土塁分布図	43

表目次

表 1	平成24～26年度国庫補助事業による調査一覧	3
表 2	出土遺物観察表	12
表 3	出土遺物観察表	20
表 4	出土遺物観察表	33
表 5	三木城本丸跡集計表	39
表 6	三木城二の丸跡集計表	39
表 7	三木城跡・付城跡出土動物遺存体	40・41

図版目次

卷頭図版1 跡部村山ノ下付城跡 T 1 主郭北辺横堀土層断面（東から）	
跡部村山ノ下付城跡 T 2 落ち込み土層断面（南西から）	
卷頭図版2 宿原城跡 T 1 北辺堀土層断面（北西から）	
宿原城跡 T 2 北壁土層断面（南西から）	
卷頭図版3 平井山ノ上付城跡 T 3 檜台状の土盛り上面全景（南西から）	
平井山ノ上付城跡 T 5 断ち割り土層断面（北西から）	
卷頭図版4 平井山ノ上付城跡 T 6 石列状遺構検出状況全景（西から）	
平井山ノ上付城跡 T 6 北端断ち割り土層断面（西から）	
図版 1 跡部村山ノ下付城跡（1）	T 1 断ち割り状況（南から）
遠景（西から）	図版 8 宿原城跡（3）
T 1 全景（南から）	T 1 南端堀立ち上がり（西から）
T 1 全景（北から）	土壘状遺構全景（南東から）
図版 2 跡部村山ノ下付城跡（2）	T 2 調査前（南から）
T 1 主郭北辺土壘検出状況（南から）	図版 9 宿原城跡（4）
T 1 主郭北辺土壘土層断面（東から）	T 2 検出状況（西から）
T 1 北側土層断面（南東から）	T 2 完掘状況（西から）
図版 3 跡部村山ノ下付城跡（3）	T 2 東端 断ち割り状況（南から）
T 2 全景（西から）	図版10 平井山ノ上付城跡（1）
T 2 全景（東から）	志染川越しに平井山ノ上付城跡を望む（南西から）
T 2 構検出状況（南から）	T 1 全景（南西から）
図版 4 跡部村山ノ下付城跡（4）	T 1 全景（北東から）
T 3 全景（北西から）	図版11 平井山ノ上付城跡（2）
T 3 全景（南東から）	T 1 土壘部土層断面（北から）
T 3 盛土土層断面（南から）	T 1 土壘部土層断面（北西から）
図版 5 跡部村山ノ下付城跡（5）	T 1 北側断ち割り土層断面（北から）
T 4 全景（南東から）	図版12 平井山ノ上付城跡（3）
T 4 土層断面（北から）	T 2 全景（北西から）
T 4 南側土層断面（北東から）	T 2 全景（南東から）
図版 6 宿原城跡（1）	T 2 ピット検出状況（北東から）
宿原城跡 空中写真（上が北 昭和38年）	図版13 平井山ノ上付城跡（4）
国土地理院撮影 MKK634-C15-6)	T 2 断ち割り土層断面（南から）
T 1 挖削作業風景（北西から）	T 2 土壘部断ち割り土層断面（南西から）
図版 7 宿原城跡（2）	図版14 平井山ノ上付城跡（5）
T 1 検出状況（北から）	T 3 調査前（南東から）
T 1 断ち割り状況（北から）	T 3 全景（南東から）
T 1 検出状況（南から）	T 3 全景（北西から）

- 図版15 平井山ノ上付城跡（6）
T 3 五輪塔空風輪検出状況（南西から）
T 3 挖部断ち割り土層断面（北から）
T 3 挖部断ち割り土層断面（北東から）
- 図版16 平井山ノ上付城跡（7）
T 4 全景（西から）
T 4 全景（東から）
T 4 土堀据部溝検出状況（西から）
- 図版17 平井山ノ上付城跡（8）
T 4 土堀据部溝断ち割り土層断面（南から）
T 4 西側断ち割り土層断面（南西から）
- 図版18 平井山ノ上付城跡（9）
T 5 全景（南から）
T 5 全景（北から）
T 5 断ち割り南端部土層断面（西から）
- 図版19 平井山ノ上付城跡（10）
T 5 断ち割り北端部土層断面（西から）
T 6 全景（南から）
T 6 断ち割り後全景（北から）
- 図版20 平井山ノ上付城跡（11）
T 6 断ち割り後全景（南から）
T 6 石列状遺構検出状況（南から）
T 6 石列状遺構検出状況（東から）
- 図版21 平井山ノ上付城跡（12）
T 6 中央断ち割り土層断面（南西から）
T 6 南端断ち割り土層断面（北西から）
- 図版22 出土遺物
- 図版23 三木城本丸跡出土動物依遺存体
- 図版24 三木城跡・付城跡出土動物遺存体

第1章 平成24～26年度の国庫補助事業による発掘調査

第1節 三木市の位置と環境

1 地理的環境

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海に渡って広がる県域である。三木市は、兵庫県の南東部に位置する内陸の都市である。平成17年10月に北東に隣接する美嚢郡吉川町と合併し新たに三木市となっている。東及び南は神戸市、南西は加古郡稻美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境界を接している。近世以前の旧分国では、播磨国美嚢郡に属する。

三木市の地形は、市域の大部分を丘陵・台地・平野で占め、わずかな山地とからなる。市の東部は帝釈山地さらには六甲山地へと統き市の西部は丘陵や台地が広がる。これらの山地や丘陵に水源を発した美嚢川や支流である志染川・小川川・淡河川などの美嚢川水系は西流し、別所町正法寺付近で加古川に合流する。加古川は瀬戸内海に注ぎ、古くから河川交通が盛んであった。市域はこれらの河川によって形成された沖積平野及び河岸段丘からなる。

丘陵と台地は、市北東部の美嚢川より北の小野丘陵、美嚢川と小川川に挟まれた吉川丘陵、小川川と志染川に挟まれた細川丘陵、志染川の南に展開する志染丘陵、志染川上流の帝釈山地、市西部の美嚢川南岸より明石市・加古郡稻美町へ広がる東播台地の6つの地域に分けられる。これらの丘陵や台地、河川の浸食作用によって形成された開析谷を縫うように有馬道・明石道・兵庫道・姫路道などの陸上交通が発達してきた。

2 歴史的環境

三木市において、最も古く人間の行動が確認できるのは旧石器時代である。美嚢川を望む段丘上の別所町和田の白長大神神社散布地、与呂木宮ノ元遺跡で後期旧石器が出土している。続く縄文時代は、志染町の窟屋1号墳下層や戸田遺跡で、土坑を検出し、その中から後期の土器が出土している。周辺の段丘上に旧石器及び縄文時代の遺跡が存在するものと思われる。

弥生時代は、市西部の美嚢川の北側丘陵で、年ノ神遺跡や和田神社遺跡などの中期から後期にかけての集落が確認されている。また、美嚢川と志染川が合流する東側段丘や志染川南側段丘でも、与呂木宮ノ元遺跡や与呂木大畑遺跡、宿原岡ノ下遺跡、小戸田遺跡などの中期から後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、台地や斜面地、段丘の至るところに中期から後期にかけて数多くの古墳が築かれるようになる。美嚢川と加古川の合流地点、市西部の美嚢川に臨む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中している。前期には市内最大の全長91mの前方後円墳である愛宕山古墳（三木市指定文化財）が築かれている。年ノ神6号墳からは三角板革綴短甲、窟屋1号墳では金銅装單鳳環頭太刀柄頭が出土しており、中央との繋がりが注目されている。集落は、西ヶ原遺跡とその西側段丘で久留美田井野遺跡が確認されている。

奈良時代以降、三木の特色となる窯業生産が始まる。最盛期は12世紀の平安時代後期鎌倉時代初期で、尊勝寺や鳥羽離宮などの院に関係する寺院や邸宅に瓦を供給していたことが確認されている。窯跡は、跡部・久留美・平井・与呂木・宿原に分布している。

南北朝時代には、古代からの名刹の伝承をもつ高男寺廃寺遺跡より、「貞和二季」(1346)銘の入った瓦が出土している。また、三木合戦時の付城跡と考えられる和田村四合谷村ノ口付城跡からは、「嘉暦二年」(1327)銘の入った硯をはじめ、南北朝期の遺物が数多く出土していることから、暦応2年(1339)に南朝方の丹生山城を北朝方の赤松氏が攻めるために集結した「志染軍陣」の可能性が指摘されている。

室町時代になると播磨の守護を赤松氏が務めている。赤松満祐によって6代将軍足利義教が殺害された嘉吉の乱により、山名氏にその座を奪われた。応仁の乱の後、赤松氏は播磨の守護に復帰するが、やがて赤松氏に代わって実権を握っていくのは有力被官であった。その中の別所氏は、東播磨で勢力をもち、則治が15世紀後半に三木を本拠地とし、三木城を築城したと考えられる。三木城は、本丸・二の丸・新城・鷹尾山城・宮ノ上要害などからなる。本丸では二分する堀を確認し、二の丸からは備前焼大甕群や建物跡、堀などの遺構を確認している。

中国地方への勢力拡大を目指す織田信長は、毛利氏を攻める足掛かりとして天正5年(1577)に播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じた。当初、別所氏の当主長治は織田方に味方していたが、天正6年(1578)3月に織田方を離反し、毛利方に与した。織田方は三木城を攻略するために三木城の周囲に付城群を築いて包囲し、兵糧攻めをおこなった。付城は毛利氏からの兵糧搬入を阻止するために、状況に応じて増やされ、40余りの付城と南側の付城を繋ぐ土塁が築かれた。やがて、三木城内の兵糧が尽き、天正8年(1580)1月17日、城主長治が自刃して開城した。

その後、織田・豊臣の支配下となり、秀吉の家臣が相次いで城主となった。関ヶ原合戦後は、姫路城主池田氏の家臣が城主となって三木城は存続したが、江戸幕府による元和元年(1615)一国一城令の政策に伴って、廃城となった。以後、城下の三木町は在郷町と性格を変え、江戸時代中期以降多くの大工職人が三木町に移住し、大工道具の需要が増えたことで金物職人も増加していく、金物の町として繁栄し現在に至っている。

〈参考文献〉

- 兵庫県教育委員会 1996 『西ヶ原遺跡』 兵庫県文化財調査報告第151冊
1999 『久留美・跡部窯跡群』 兵庫県文化財調査報告第186冊
2002 『年ノ神古墳群』 兵庫県文化財調査報告第234冊
2002 『和田神社遺跡』 兵庫県文化財調査報告第238冊
2009 『窟屋1号墳』 兵庫県文化財調査報告第353冊
2012 『吉田住吉山遺跡』 兵庫県文化財調査報告第409冊
- 三本市 1970 『三本市史』
- 三本市教育委員会 2000 『三本市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 II 三本市文化研究資料第14集
2001 『三本市遺跡分布地図』 三本市文化研究資料第17集
2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』 三本市文化研究資料第25集
- 三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会 2010 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』 三本市文化研究資料第23集 三本市教育委員会

第2節 平成24～26年度の発掘調査

1 調査一覧

平成24～26年度に実施した国庫補助事業による発掘調査は4件3遺跡である（表1）。このうち、跡部村山ノ下付城跡は重要遺跡範囲確認調査、宿原城跡は駐車場造成工事に伴う確認調査、平井山ノ上付城跡は史跡内容確認調査である。

表1 平成24～26年度国庫補助事業による調査一覧

No.	遺跡名	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	調査後の措置	担当者
1	跡部村山ノ下付城跡	跡部字裏山ノ谷 287-1、字裏山 289・289-3・ 289-13・ 289-14・289-17	平成25年2月18日 ～3月12日	47 m ²	埴、土壘、落ち込み 須恵器・土師器・瓦・ 磁器	現状保存	金松
2	宿原城跡	宿原 1038-2・ 1038-4	平成25年12月12日 ～平成26年1月6日	28 m ²	埴 須恵器・土師器・瓦・ 陶磁器	慎重工事	金松
3	平井山ノ上付城跡	平井字丸山 361-4・361-5、 与呂木字見谷 684-43	平成26年2月25日 ～3月31日	47 m ²	土壘、中世墓？ 鉄製品、陶磁器	現状保存	金松
		平井字丸山 361-23、与呂木 字見谷南 685-3・685-82	平成26年11月27日 ～平成27年1月5日	41 m ²	土壘、石列状遺構 磁器	現状保存	金松



図1 平成24～26年度国庫補助事業による調査位置図

第2章 調査の成果

第1節 跡部村山ノ下付城跡

1 はじめに

跡部村山ノ下付城跡調査は、跡部字裏山ノ谷 287-1 ほかにおいて、国史跡「三木城跡及び付城跡・土壘」の追加指定に向けて、その範囲や構造を確認するため実施した。

跡部村山ノ下付城跡は、跡部集落裏山の台地上西縁に位置する（図2）。東隣の久留美村内^{くろみむら}谷上付城跡とともに、志染川に近接していることから、河川交通を抑える立地であるといえる。標高74m、比高14mである。天正6年（1578）～8年にかけて繰り広げられた三木合戦に伴う、織田方の付城跡とされ、特に天正6年7月末～8月中旬頃に織田信忠の軍勢が築いた平井山ノ上付城跡と同時期に築かれた可能性が指摘されている（三木市教育委員会2012）。城主は『播磨鑑』によると、織田信澄とされている。周辺には、弥生時代中期の集落遺跡とされる跡部東谷遺跡（三木市教育委員会1998a）、平安時代後期～鎌倉時代の窯跡とされる跡部1号窯A・B・C（三木市教育委員会1998b）等が所在する。

現地調査は平成25年2月18日～平成25年3月12日に実施した。調査面積は47m²である。

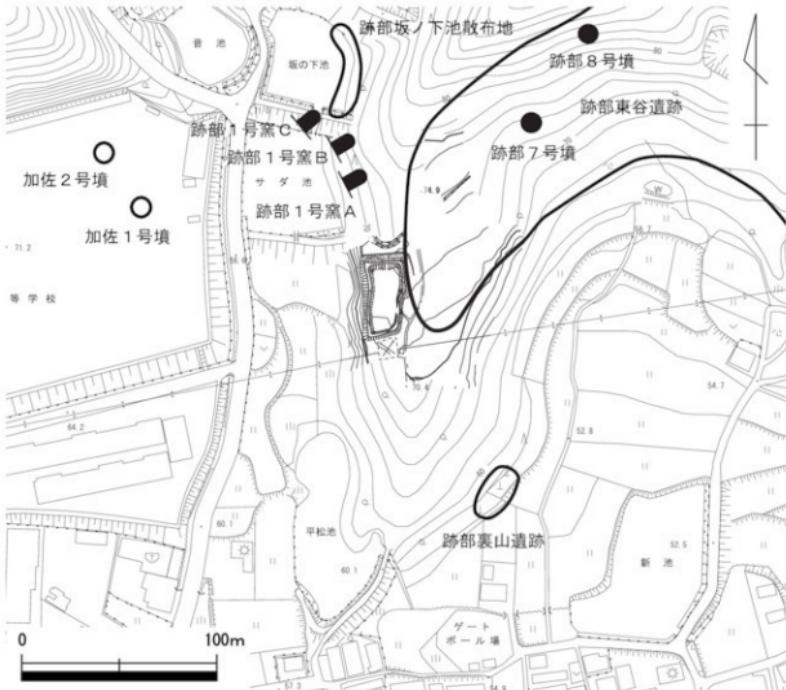


図2 跡部村山ノ下付城跡 位置図

2 繩張の概要（図3）

跡部村山ノ下付城跡は、土塁と横堀で囲まれた単郭方形の主郭を中心部とし、周辺に緩やかな尾根が広がる。主郭東辺北半がわずかに東へ張り出し、東辺南半部の土塁が切れている箇所が虎口と考えられる。横堀は、現状では主郭北辺と東辺北端部で確認できる。城域面積は、主郭部のみで約 1,000 m²である（三木市教育委員会 2012）。

3 調査の方法

今回の調査は、4箇所の調査トレンチを設定した（図3）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査及び遺構掘削などを行った。トレンチ配置図（1/500）・遺構平面図（1/50）は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図（1/20）は手実測を行った。

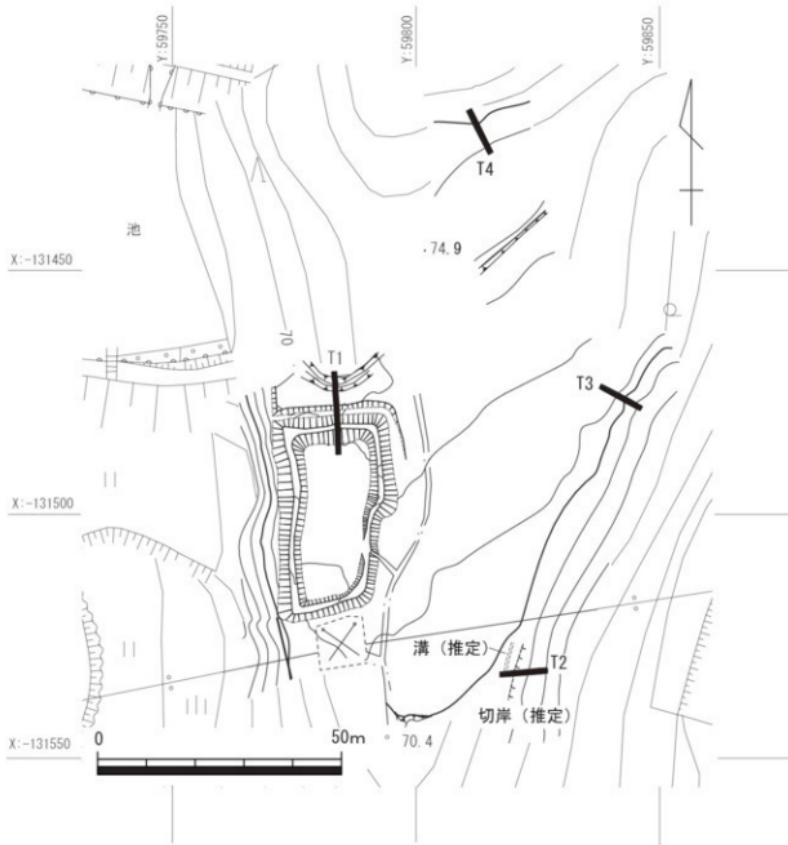


図3 トレンチ配置図

4 調査の結果

T 1 (図4)

主郭北辺の土壘・横堀及びその北側に東西に延びる溝を直交するかたちで、 $1 \times 17m$ のトレーニングを設定した。土壘については、裾部に断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、黄褐色・明黄褐色系の砂質土を積み上げて築かれていることが確認できた。規模については、溝の最深部を基準とすると、基底部幅 $6.4m$ 、高さ $1.55m$ を測る。横堀の規模は、幅約 $2m$ 、深さ $0.75m$ を測り、断面がV字状であることが判明した。

北側の溝については、小規模な溝を数回にわたる掘り直しが確認できた。昭和30年代初頭まで、サダ池に水を溜めるための集水用の溝として利用されていたとのことであり、おそらく近世以降のものと考えられる。

遺物については、横堀・土壘盛土から12世紀頃の須恵器・土師器が出土した。これについては、サダ池東斜面に所在する跡部1号窯A・B・C（三木市教育委員会1998b）に伴うものと考えられる。その他、横堀から12世紀末葉～13世紀前半の白磁碗（1）、15世紀前半～中頃の土師器壠（2）が出土している。

T 2 (図5)

主郭南東部に近接する傾斜変換点付近において、城域を画する遺構の有無を確認するため、 $1 \times 10m$ のトレーニングを設定した。

トレーニング西側において、地山上面において、幅 $0.5m$ 、深さ $0.25m$ の溝のほか、その $1.6m$ 東側において、幅 $0.3m$ 、高低差 $0.4m$ の人工的に削り落とした切岸を確認した。切岸以東は緩やかに傾斜している。溝と切岸の存在から、軍勢の駐屯部として利用されたと推定される主郭周間に広がる比較的緩やかな空間を区画する遺構と考えられる。遺物については、切岸以東の堆積土から須恵器の小片が1片のみ出土した。

T 3 (図6)

主郭東辺から東へ約 $50m$ の位置にある切岸状遺構の状況を確認するため、 $1 \times 10m$ のトレーニングを設定した。

断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、緩やかに傾斜する地山上面において、最大 $0.85m$ の黄褐色系の砂質土による盛土によって切岸状遺構が造成されていることが判明した。遺物については、表土・堆積土・盛土から12世紀頃の須恵器・土師器が出土したほか、排土から青磁碗（3）が1点出土した。

切岸状遺構が形成された時期については、12世紀以降であることは明らかであるが、それ以上のことは判然としない。ただ、T 2の切岸の堆積状況に比べて、表土からの堆積が $40cm$ と浅いことから、付城に伴う遺構とするよりも、近世以降に畑地として造成された可能性の方が高いかも知れない。

T 4 (図7)

主郭北東側の尾根上に展開する数段からなる段状遺構の状況を確認するため、 $1 \times 10m$ のトレーニングを設定した。

断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、上段については、緩やかに傾斜する地山上面から最大約 $0.8m$ の盛土とみられる黄褐色系砂質土によって構成されていることが判明した。下段

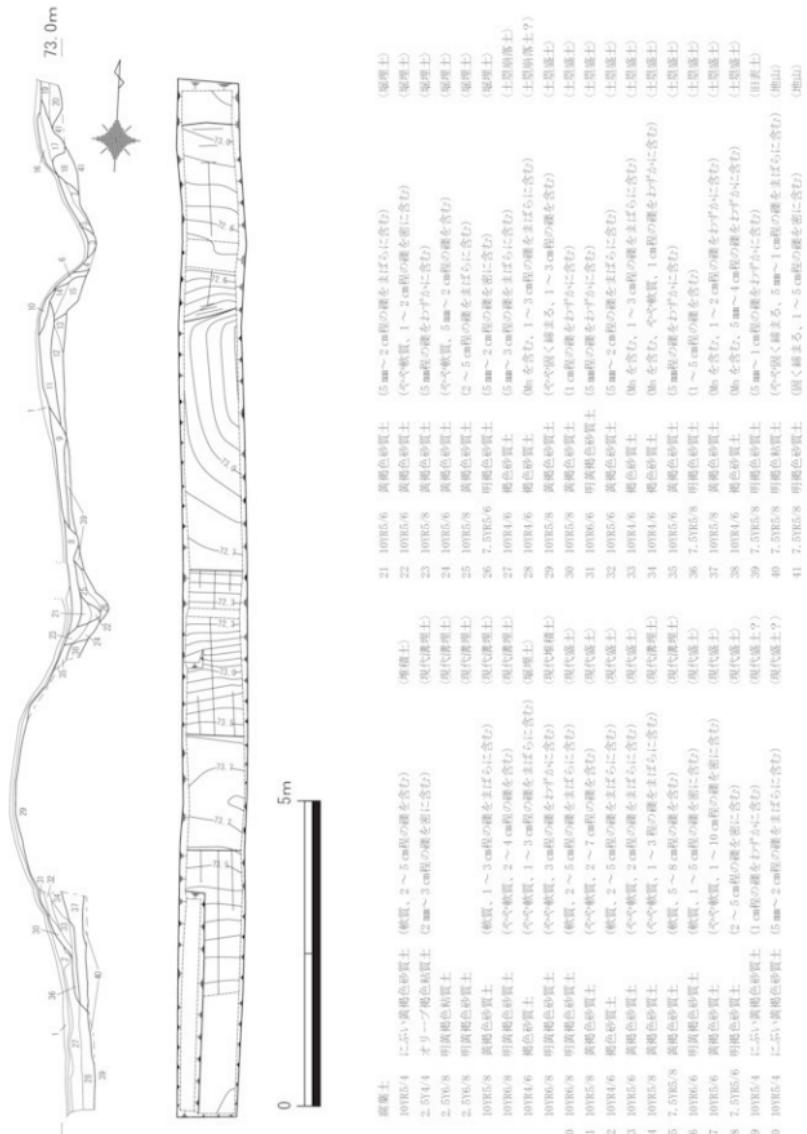


図 4 T 1 平面・断面図

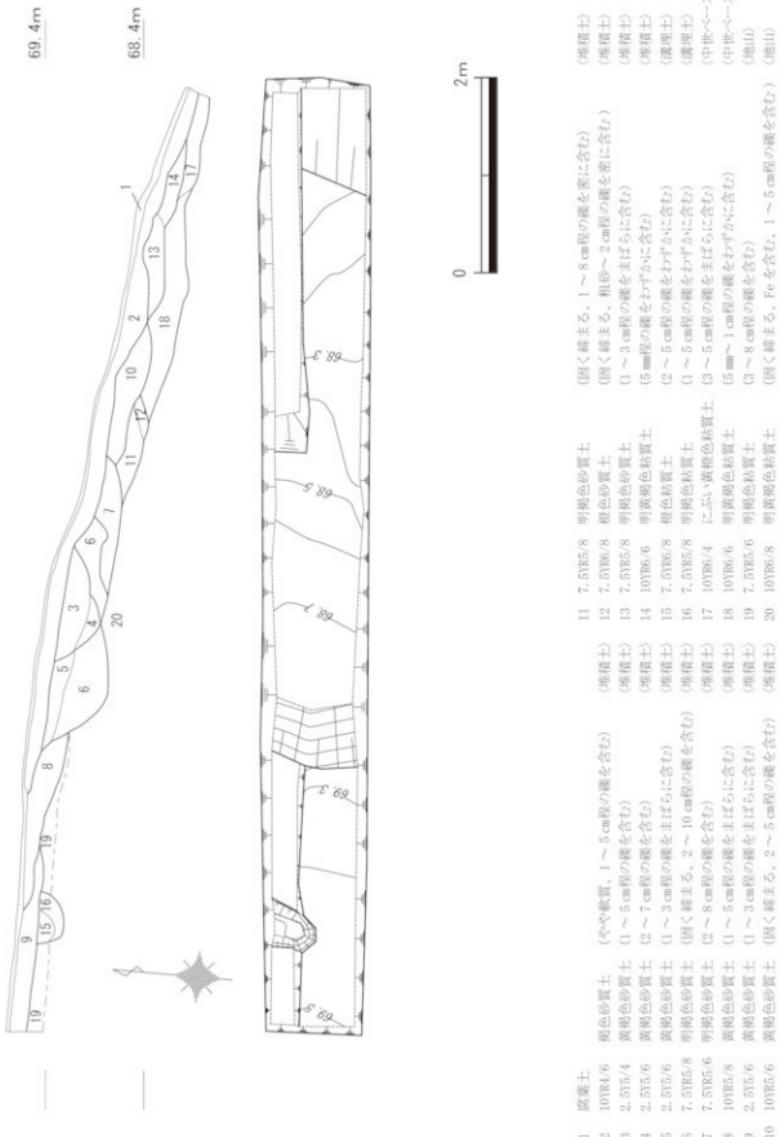


図5 T2 平面・断面図

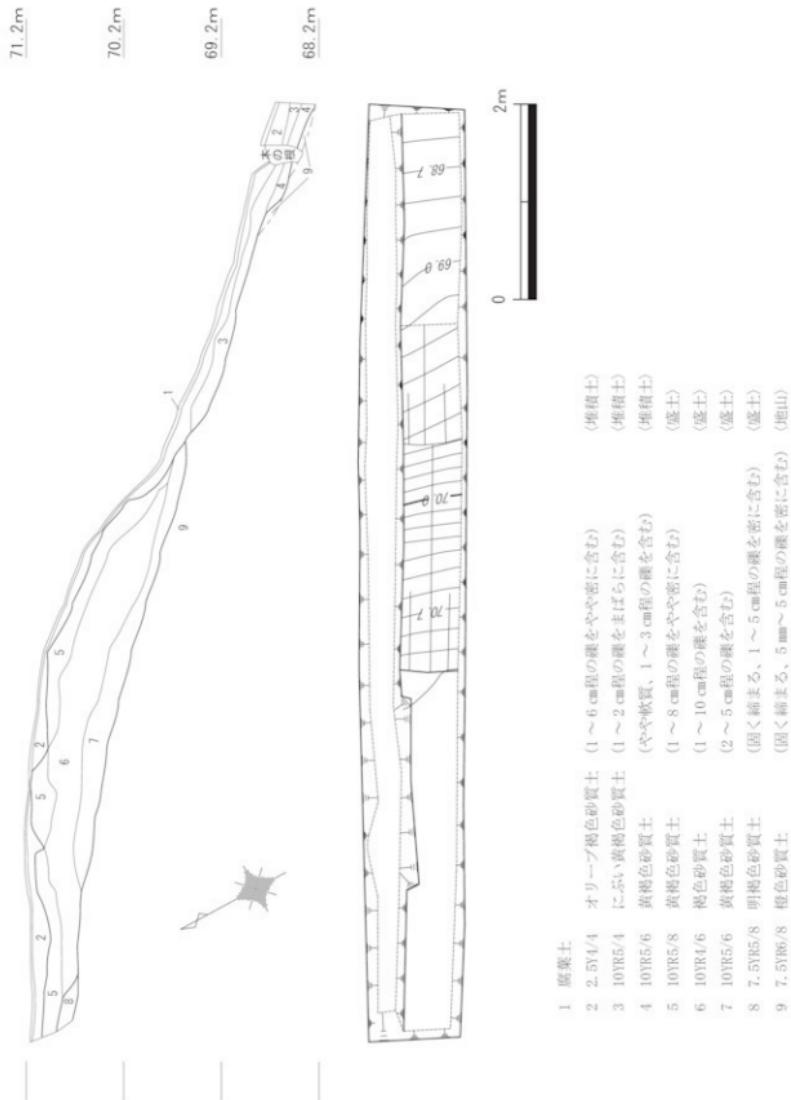


図6 T3 平面・断面図

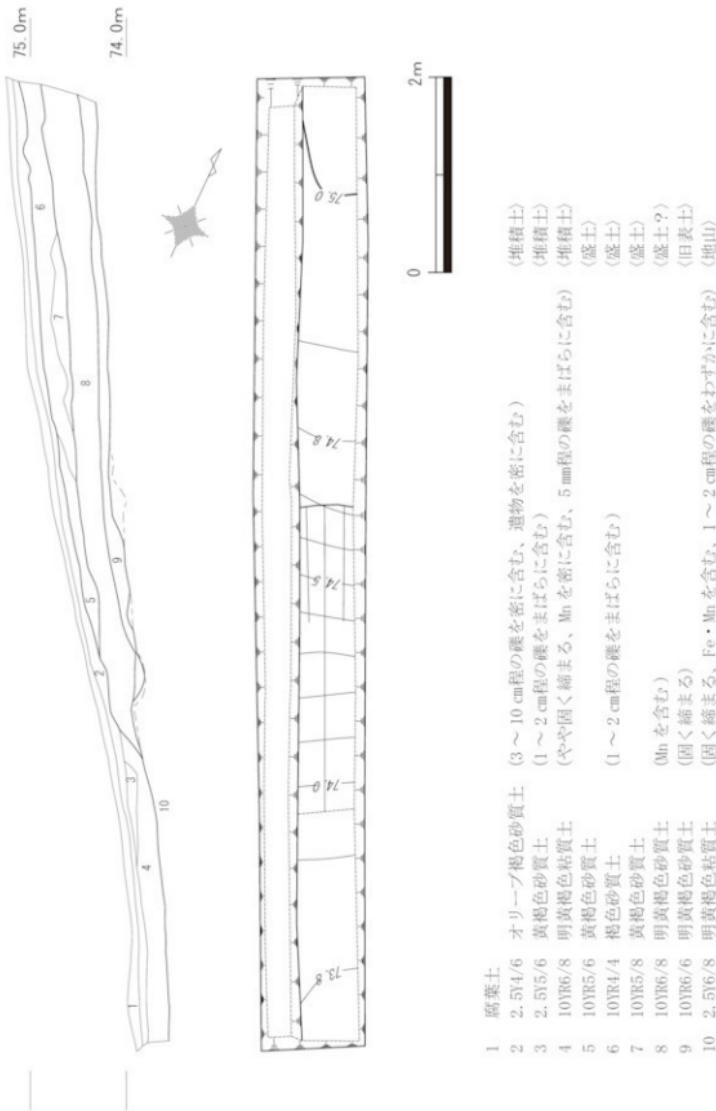


図 7 T 4 平面・断面図

からの高さは約1.6mを測る。

遺物については、表土・堆積土から12世紀頃の須恵器・土師器が比較的多く出土した。これについて、跡部1号窯A・B・Cに伴うものと考えられる。

段状遺構が形成された時期については判然としないが、用途については、立地的に畑地の可能性は低いとみられることから、付城の軍勢の駐屯部もしくは跡部1号窯A・B・Cに伴う遺構の可能性を想定すべきであろう。

5 出土遺物（図8）

コンテナケース1箱分の遺物が出土した。その大半が須恵器であり、その他瓦・土師器・磁器が出土している。

須恵器・土師器・瓦は概ね12世紀頃のもので、基本的にはサダ池東斜面に所在する跡部1号窯A・B・Cに伴うものと考えられる。

付城に伴うと断定できる遺物は出土していないが、特徴的な遺物を3点取り上げる。細かな計測値などは表2を参照していただきたい。

T 1

白磁碗（1） 華南産白磁碗である。内面及び外面上半は施釉され、外面下半は釉がかからず露胎であり、胎土は白く焼けている。外面施釉部には虫喰いがみられる。兵庫津遺跡編年（岡田2004）のII期前半に該当し、時期は12世紀末葉～13世紀前半とみられる。

土師器壺（2） 口縁端部を水平に外開きして丸くおさめる。外面肩部にタタキを施す。兵庫津遺跡編年（岡田2004）のV期の瓔形タイプIV類に該当し、時期は15世紀前半～中頃とみられる。

T 3

青磁碗（3） 龍泉窯系青磁碗である。外面の文様はなく、口縁部は外方に開く。灰がかぶっている。細片のため詳細な時期は不明であるが、13世紀～16世紀に収まるものとみられる。

表2 出土遺物観察表

番号	トレンチ	遺様名	遺物名	基様(部位)	色調	胎土	焼成 口縁	法量(cm) 底径	は復元後・残存量 裏側 裏面	形態的特徴・調整など
1	T1	主郭 横堀	白磁	皿(全体)	外面:SYB/1 内面:SYT/2 灰白	やや密 虫食いあ り	良	-	-	(4.2) 外面:施釉 内面:施釉
2	T1	主郭 横堀	土師器 壺(口縁～肩部)	外面:5YR7/3 にぶい縁 内面:7SYR7/1 明褐色	やや密 1mm以下の 白色砂粒、1～ 7mmの小石を含む	良	(15.9)	-	(4.75) 外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	
3	T3	掛土	青磁	碗(口縁部)	外面:10GY6/1 緑灰 内面:10GY6/1 緑灰	密 1mm以下の黒 色砂粒を含む	良	(7.6)	-	(2.75) 外面:施釉 内面:施釉

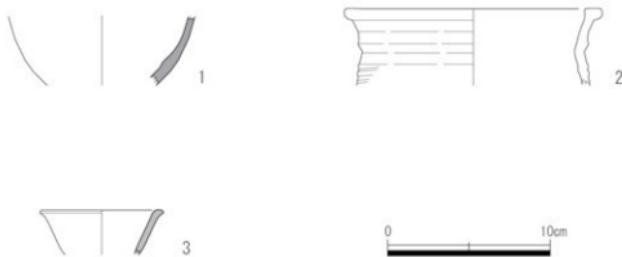


図8 出土遺物 ($S=1/3$)

6まとめ

跡部村山ノ下付城跡は、土壘と横堀で囲まれた単郭方形の主郭と周辺の緩やかな尾根を部分的に区画して利用した駐屯部からなる二重構造の付城である可能性が高いことが判明した。

ただ、T 3 の切岸状遺構、T 4 の段状遺構が付城に伴う遺構かどうかは判然としなかったため、城域を確定することはできなかった。今後の課題したい。

〈引用文献〉

- 岡田章一 2004 「時期設定と土器・陶磁器組成の変遷」『兵庫津遺跡』II 兵庫県教育委員会
- 三木市教育委員会 1998 a 「跡部東谷遺跡発掘調査概要」『平成9年度 三木市社会教育活動状況報告書』
- 1998 b 「跡部1号窯発掘調査概要」『平成9年度 三木市社会教育活動状況報告書』
- 2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』

第2節 宿原城跡

1 はじめに

宿原城跡調査は、三木市宿原 1038-2・1038-4において、常嚴寺の駐車場造成工事に伴い、事業に先立ってその内容を確認し、事業者と協議する資料を得るために実施した。

宿原城は、志染川左岸の氾濫原よりも高い河岸段丘の北縁部に立地する平城である（図9）。東西に延びる有馬道が城域南辺に沿って通っている。別所氏居城三木城の本丸からは、東へ約1.2km離れている。現在、中心部は曹洞宗君峰山常嚴寺の境内となっている。

現地調査は、平成25年12月12日～平成26年1月6日に実施した。調査面積は28m²である。



図9 宿原城跡 位置図

2 歴史

常嚴寺の歴史については、天文 21 年（1552）戦火を逃れて当寺に移り住んだ京都五山文学僧仁如集堯が記した『鎌水集』によると、「三木郡久留美莊君峰山盛嚴寺」と記され、創建時期不明の古刹であり、元は律または教（密教）の寺院であったとする。赤穂郡宝林寺（上郡町）の住持大圭宗价がこの寺に訪れて臨濟宗の禅寺に変え、その後、大圭の法嗣大慎口初禪師が応仁の乱を避けて当寺に移り、荒廃した寺を中興した。のちに東播磨に居を構えた別所氏（則治）が壇越となり、その子息玉江真長^{モリエマサナガ}が跡を継いだ。真長は則治死後、三木別所氏 3 代当主別所村治の老臣となつたと考えられる。永正 17 年（1520）6 月真長没後、その甥梅心真香^{メイシンマサヲ}が継いだ。真香は 4 代当主別所安治筆頭老臣種徳軒一安と同一人物であり、安治の伯父である。永禄 10 年（1567）5 月真香没後、真香の甥で村治子息とみられる明甫真質^{マツブマサヒラ}がその跡を継いだものと思われる。なお、永禄元年閏 6 月、盛嚴寺某が謀反を企て村治不在の三木城へ乱入するも、留守衆が「南構」にてこれを防いでいる（高橋文書）。この人物は村治從兄弟の別所秀豊の可能性が指摘されている（依藤 2010）。

このように、常嚴寺は当時「盛嚴寺」と呼ばれ、別所氏が三木に拠点を構える前から存在し、その後別所一族が住持を務めるかたわら、老臣として本家に仕え、時には謀反を企てるほどの力を持っていたことがわかる。

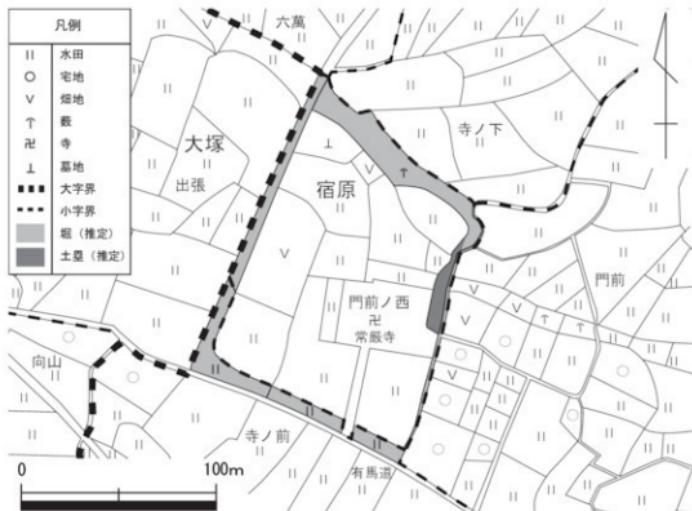


図 10 宿原城復元図（明治期字限図を基とし、昭和 44 年三木市都市計画図 [S=1/2500] で補正のうえ作成）

3 縄張の概要（図 10・11）

宿原城跡は、規模約 $110 \times 135\text{m}$ の単郭方形を呈す。現況は、内部は常嚴寺の境内のほか駐車場・会社敷地・宅地・墓地などとなっており、南辺手前には県道が横断している。墓地には赤松円心のものとされる五輪塔が土塹に埋まっている。北辺は河岸段丘を利用した堀が残っている。東辺・西辺は堀の名残とみられる凹状の道路となっており、南辺は宅地等になっている。土塁については、東辺中央部において土塁状遺構が確認できる。

神戸地方法務局所蔵の明治期字限図によって、宿原城跡の復元を試みたところ、南辺は有馬道に沿って横長の田の区画となっていたことから、元は堀であったと考えられる。そして、東辺北半部は藪となっていることから、明治期には土塁が残っていた可能性が指摘できる。すなわち、四周には堀があげられ、少なくとも東辺北半部には土塁があったと考えられる。寺敷地の西辺と北辺に細長い田の区画があるが、これについては内堀の痕跡かもしれない（金松 2015）。

3 調査の方法

調査前に T 1 周辺に生い茂る竹木の伐採作業を実施した後、遺跡の内容を確認するため 2 箇所の調査トレンチを設定した（図 11）。人力掘削は委託し、表土除去・土層断面・遺構面の精査及び遺構掘削などを行った。トレンチ配置図（1/1000）、遺構平面図（1/50）は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図（1/20）は手実測を行った。

4 調査の結果

T 1（図 12）

駐車場造成敷地内において、東西 $2\text{ m} \times$ 南北 11.5m のトレンチを設定した。

推定幅 15m 以上、南側墓地からの深さ約 4.5m の東西方向の堀を確認した。堀は南側から北側へ土が流れ込んで埋まっていることから、土量が多いことから、土塁盛土の流入土の可能性がある。埋土は上層・中層・下層に分かれ、堀底となる上層は主に黒褐色シルト質粘土層であることから、滲水していたと考えられる。上層埋土の堆積は約 0.3m であり浅いことから、堀浚えが行われていたとみられる。中層はやや軟質のオリーブ褐色・黄褐色砂質土層であり、空堀とみられる。下層は黄褐色砂質土層であり、空堀とみられる。トレンチ南端で堀の立ち上がりが確認された。下層上位で、より多くの遺物が出土している。特に下層は、土塁の盛土が流れ込んで形成された可能性が考えられる。

堀埋土からの出土遺物は、12世紀頃の須恵器片・瓦片が多くを占め、その他奈良時代の須恵器片（1）も出土している。

T 2（図 13）

将来的に擁壁工事を検討中である土塁状遺構において、南北 $1\text{ m} \times$ 東西 5 m のトレンチを設定した。

土塁状遺構の盛土は、ビニール等が含まれていたことから、近年の客土であることが確認できた。遺構面は、黄褐色砂質土・オリーブ褐色砂質土・明黄褐色砂質土の盛土によって形成され、遺構面及び断ち割りからは奈良時代頃の平瓦（3・4）が出土した。この遺構面の高さは、水路を挟んだ西側敷地の高さとほぼ同じであることから、現状では土塁がみられないことが明らかと

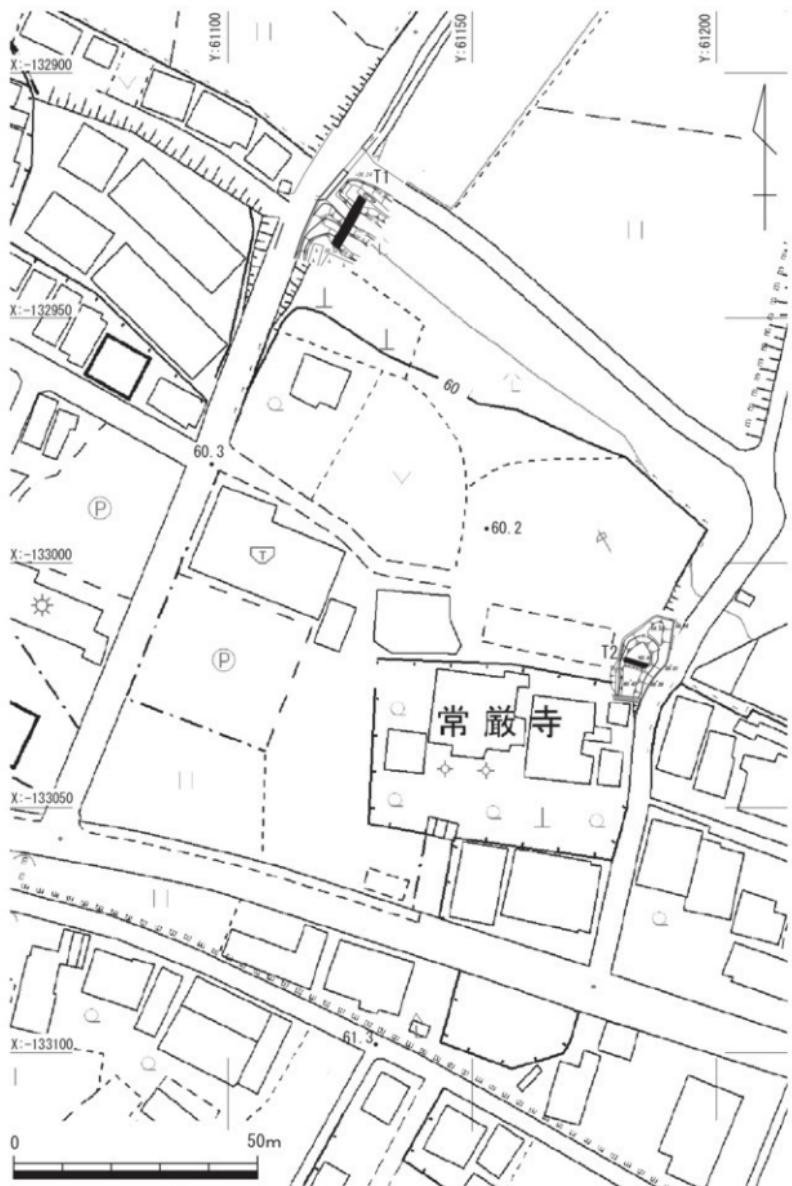


図11 トレンチ配置図

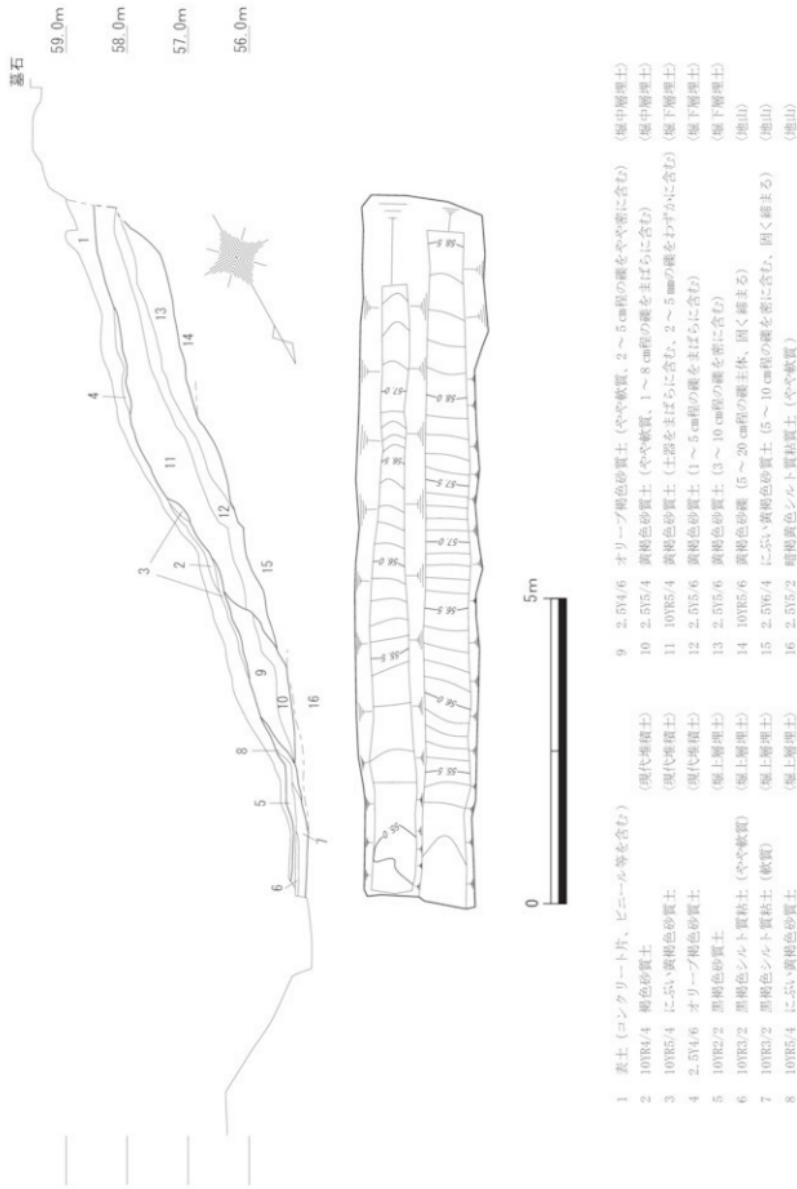


図 12 T1 平面・断面図

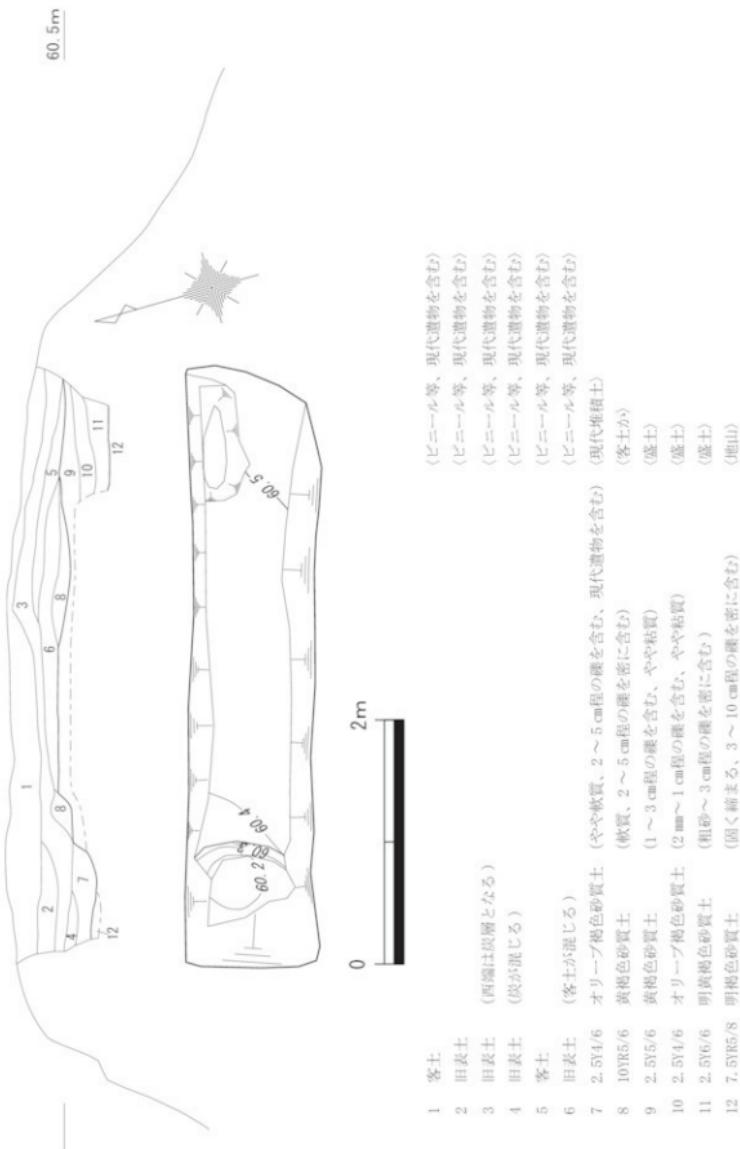


図 13 T2 平面・断面図

なった。ただ、土壌状遺構東辺の道は凹状に窪んでいることから、堀を掘削した土を当該地において土壌状に盛っていた可能性は否定できない。

5 出土遺物（図14）

コンテナケース1箱分の遺物が出土した。その大半が須恵器・瓦であり、土師器と近現代とみられる陶磁器がわずかに含まれる。城跡に伴う遺物は出土しなかったが、特徴的な遺物を4点取り上げる。細かな出土層位、計測値などは表3を参照していただきたい。

表3 出土遺物観察表

番号	トレンチ	遺構名	遺物名	器種(部位)	色調	釉土	焼成	法量(cm) ()は復元値・残存値 口径 底径 器高			形態的特徴・調整など
								表面	底面	器高	
1	T1	堀上解理土	須恵器	环	外面:5Y5/1 灰 内面:7SY4/1 灰	直火	良	14.2	8.8	5.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ
2	T1	堀上解理土	須恵器	鉢(口縁部)	外面:7SY4/1 灰 内面:5Y8/1 灰白	直火	良	(31.4)	—	(5.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ
3	T2	遺構面積出中	瓦	平瓦	外面:10YR6/1 灰灰 内面:7SY5/1 灰	直火	やや密 良	長(8.6)	幅(8.1)	厚(2.2)	凸面:継目叩き 凹面:布目
4	T2	東堀断面	瓦	平瓦	外面:5Y8/1 灰 内面:2SY7/1 灰白	直火	密 良	長(12)	幅(6.5)	厚(1.95)	凸面:斜格子叩き 凹面:布目

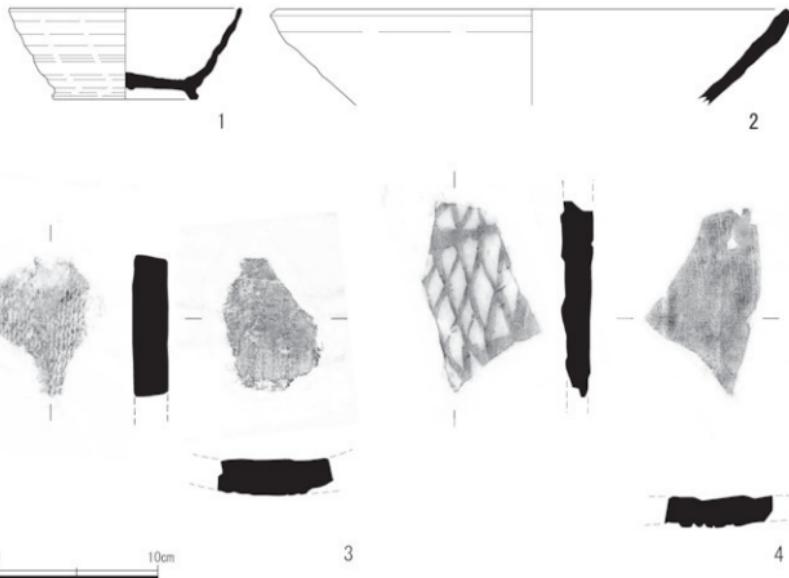


図14 出土遺物 (S=1/3)

T 1

須恵器壺（1） 体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がる。底部は未調整であり、ハの字型の高台を付す。法量等から平城宮 S K820 出土の壺BⅢに相当すると考えられる（古代の土器研究会編 1992）。平城宮Ⅲ期に該当し、時期は8世紀第2四半期とみられる。

須恵器鉢（2） 内外面に回転ナデ調整を施し、口縁端部を平坦に仕上げている。森内 1999 分類の鉢 I b に該当し、時期は12世紀とみられる。

T 2

平瓦（3・4） 3は凸面繩目叩き平瓦である。凹面は布目痕がみられる。古代寺院からの出土例が多いことから、時期は奈良時代頃のものとみられる。

4は凸面斜格子叩き平瓦である。凹面は布目痕がみられる。古代寺院からの出土例が多いことから、時期は奈良時代頃のものとみられる。

6まとめ

宿原城跡は、明治期字限図による復元と発掘調査により、周囲に堀がめぐり、北辺については、堀とともにその内側に土塁が設けられていた可能性があることが判明した。東辺については、少なくとも東辺北半部には土塁が存在していたとみられるが、残存している土塁状遺構は近年の盛土であることが判明した。往時は周囲に土塁が設けられていたかもしれない。

出土遺物は12世紀頃の須恵器・瓦片が多くみられ、周辺に同じ頃に操業された宿原窯跡群やその関連遺跡とみられる宿原寺ノ下遺跡（三木市教育委員会 1996、兵庫県教育委員会 2004）及び大塚出張遺跡（三木市教育委員会 2014）などが確認されていることから、これらは遺構形成にあたり混入したものと考えられる。一方、奈良時代頃の須恵器壺と瓦が出土していることから、久留美・跡部窯跡群同様、宿原窯跡群が奈良時代にも操業していた可能性が考えられる。もしくは、常嚴寺が古代寺院にまで遡る可能性も指摘しうるかもしれないが、寺院遺構が伴っていないため、その可能性は低いと考えられる。

城郭としての時期については、別所一族が盛嚴寺の住持を務め、三木城において合戦が繰り広げられるようになる16世紀前半頃に堀や土塁を設け、城郭としての性格を帯びていき、三木城の支城として機能したと考えてよかろう。

〈引用文献〉

金松誠 2015 「宿原城」『図解 近畿の城郭』II 玄光社出版

古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 I 都城の土器集成』

兵庫県教育委員会 2004 『宿原寺ノ下遺跡』 兵庫県文化財調査報告第 264 冊

三木市教育委員会 1996 「宿原寺ノ下遺跡確認調査」『平成 7 年度 社会教育活動状況報告書』

2014 『大塚出張遺跡-特別養護老人ホームえびすの郷建設に伴う発掘調査報告書-』

森内秀造 1999 「出土土器の検討」『久留美・跡部窯跡群』兵庫県文化財調査報告第 186 冊 兵庫県教育委員会

依藤保 2010 「三木城主赤松別所氏の動向」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』 三木市教育委員会

第3節 平井山ノ上付城跡

1 はじめに

平井山ノ上付城跡調査は、平井字丸山 361-4、同 361-5、同 361-23、与呂木字見谷 684-43、与呂木字見谷南 685-3、同 685-82において、史跡指定による見学者の急増に伴い、遺跡の保護に支障をきたす恐れが生じていることから、今後、史跡の保存管理を適切に進めていく資料を得るために、2ヶ年度に分けて確認調査を実施した。

平井山ノ上付城跡は、三木合戦の際、羽柴秀吉が本陣とした付城跡である。美嚢川と志染川の間の南西に面した山上に位置し、南西に三木城を望むことができる。標高 145m、比高 94m である。

天正 6 年（1578）7 月、織田信長の長男、信忠が三木城を支援する神吉城や志方城（ともに加古川市）を攻略した後、築城したとされている。8 月に羽柴秀吉が入ると、10 月 15 日「三喜之付城（当城のことか）」に津田宗及を招いて茶会を開催した。同 22 日に別所方が襲来して合戦が繰り広げられたが、別所長治の弟別所定らが討死するなど、別所方の敗北に終わっている。

現地調査は、平成 25 年度分は、平成 26 年 2 月 25 日～3 月 31 日、平成 26 年度分は、平成 26 年 11 月 27 日～平成 27 年 1 月 5 日に実施した。調査面積は 88 m² である。

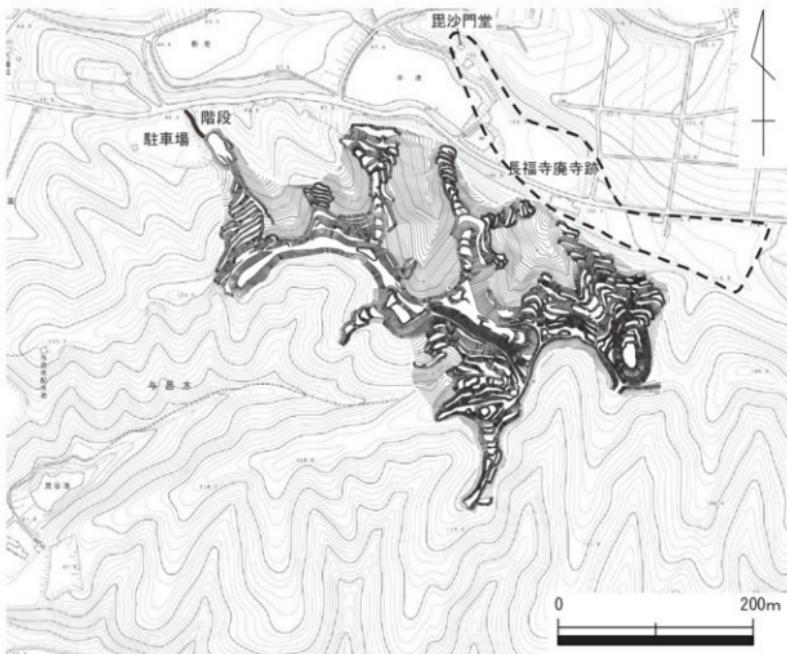


図 15 平井山ノ上付城跡 位置図



100m
0

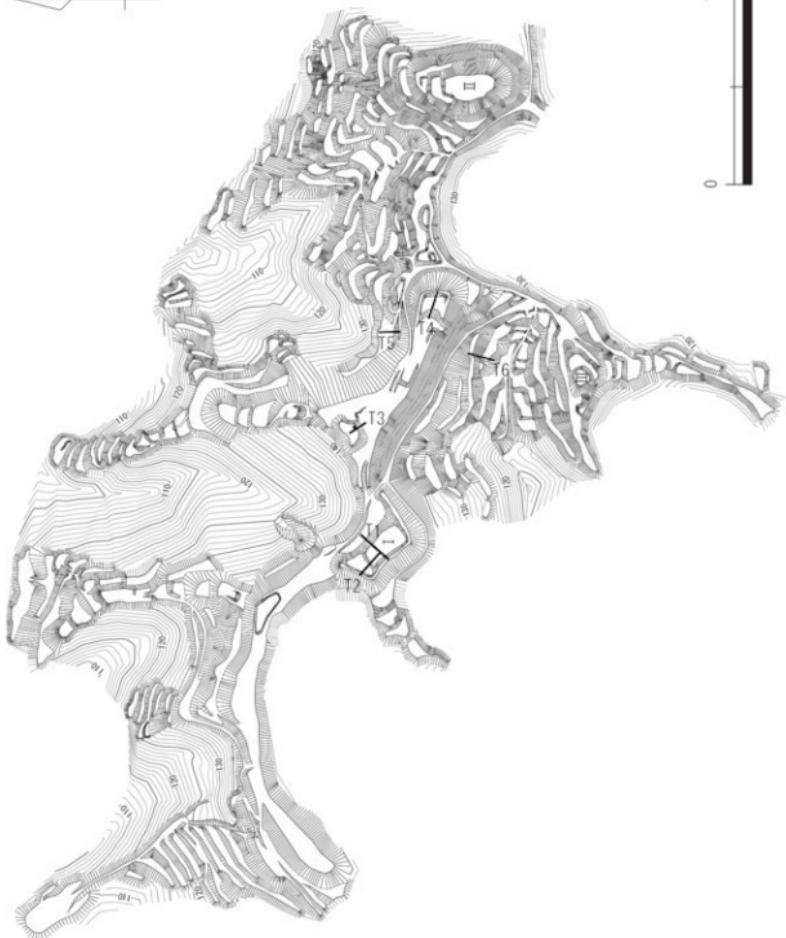


図 16 トレンチ配置図



図17 播磨平井山（「浅野文庫諸国古城之図」広島市立中央図書館蔵）

2 繩張の概要（図 16）

平井山ノ上付城跡は、土塁囲みの主郭Ⅰを中心として、東西に尾根が延び、その尾根から派生する北側支尾根に曲輪群が設けられている。支尾根間の谷部に雑壇状の曲輪群を設け、軍勢の駐屯部が確保されている。主郭の東側に延びる尾根は、部分的に土塁で囲まれ、櫓台状の土盛りが見られる。曲輪Ⅱ・ⅢがⅠと独立して曲輪群を形成している。Ⅰの東側尾根とⅢに挟まれる谷が大手とみられる。城域面積は約 38000 m²であり、三木城を包囲する付城群の中では最大規模を誇っている（三木市教育委員会 2012）。

3 調査の方法

平成 25 年度は主郭とその北東に位置する櫓台状の土盛りに、計 3 箇所の調査トレンチを設定し、平成 26 年度は主要部東端部の土塁囲みの平坦地、主要部東側の北側谷部の平坦地、推定大手道北側の段状の平坦地群に計 3 箇所の調査トレンチを設定した（図 16・18）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査などを行った。トレンチ配置図（1/500）・遺構平面図（1/50）は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図（1/20）は手実測を行った。

4 調査の結果

T 1（図 19）

主郭中央部を縦断するかたちで、1×20m のトレンチを設定した。部分的に断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、上段曲輪北辺は、切土によって平坦化されたとみられる地山上面から 6 層にわたる 1.0m の盛土によって造成されており、南辺においては 0.2m ほどの盛土がなされていることが判明した。南辺土塁は盛土上面に築かれており、高さ 0.5m を測る。主郭側への土塁崩落土がほとんどみられないことから、当初においても高さ 1m に満たないものであったと判断できる。トレンチ北端の地山から南端の土塁上面の比高差は 2.8m を測る。

上段曲輪北辺裾部の盛土崩落土において、鉄釘（1）が 1 点出土した。

T 2（図 19）

主郭西側を横断するかたちで 1×15m のトレンチを設定した。上段曲輪において、ピット 1 基を検出した。下段曲輪は切土されたとみられ、地山上面が遺構面となる。西辺土塁は地山上面から築かれており、高さ 0.4m を測る。下段曲輪側への土塁堆積土が約 0.3m であることから、当初においても土塁の高さはそれほど高くなかったことが判明した。なお、上段曲輪の高さは下段曲輪上面より 0.8m を測ることから、西辺土塁よりも高く盛られていたことが明らかとなった。

上段曲輪上面において、同一個体とみられる鉄鍋片（2）が 2 点出土したほか、信楽焼とみられる無釉陶器擂鉢片（3・4）が 2 点出土した。

T 3（図 20）

櫓台状の土盛りを直交するかたちで、1×10m のトレンチを設定した。天和 3 年（1682）頃に成立したとされる『浅野文庫諸国古城之図』所収「播磨平井山」の絵図（図 17）に、赤丸印が記されている箇所である。

土盛りの上面から斜面にかけては、表面に礫が貼り付けられており、五輪塔の空輪・風輪部が露出した状況で埋まっていたことが確認できた。火輪以下は埋まっておらず、空輪・風輪部のみ

が残存していた。

土盛り裾部以南に断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、土盛りは礫を密に詰めて盛られており、裾部には溝が存在していたことが判明した。

先述の絵図にその存在が記されていることから、天和3年以前に設けられたものと分かり、竹中半兵衛の墓も同様に赤丸印となっていることから、墳墓と認識されていたようである。中世の経塚や墳墓、もしくは古墳を利用したそれらの可能性があるが詳細は不明である。

T 4 (図 21)

主要部東端部の土星込みの平坦地において、 $1 \times 15m$ のトレンチを設定した。部分的に断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、盛土によって平坦地と土星が造成されていることが判明した。平坦地は 20 cm ほどの簡単な盛土造成が行われ、土星は高さ 80 cm を測り、平坦地よりも丁寧に盛られていたことが判明した。土星裾部には溝が存在していたことが判明した。

T 5 (図 22)

主要部東側の北側谷部の平坦地において、 $1 \times 11m$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、山側（南側）から谷側（北側）に、土を流し込むかたちで谷部を埋めたうえで、その上面に水平方向の盛土整形を行っていることが判明した。造成土は谷側にかけて徐々に厚くなっており、 1 m 以上の盛土造成により平坦地を造成していたことが明らかとなつた。

T 6 (図 23)

推定大手道北側の二段からなる段状の平坦地群において、 $1 \times 15m$ のトレンチを設定した。部分的に断ち割りを設けて土層断面を確認したところ、上段の平坦地において、石列状遺構を検出した。南北に2列並び、北側は円い石を2段に積み、南側は四角形状に加工された石1段で構成されている（図 24）。石列南側は地山をほぼ垂直に削って段差が設けられている。石列は東側に延びている可能性がある。

上段平坦地については、石列の北側同一レベルの土層（21）が当時の遺構面と考えられる。石列南側の一段下の地山面が平坦地を形成すると考えられることから、上段と下段の間に中段の平坦地が存在していたとみられる。

なお、下段遺構面については、部分的な断ち割りしか行っていないため判断しかねるが、盛土造成により形成されているものといえる。

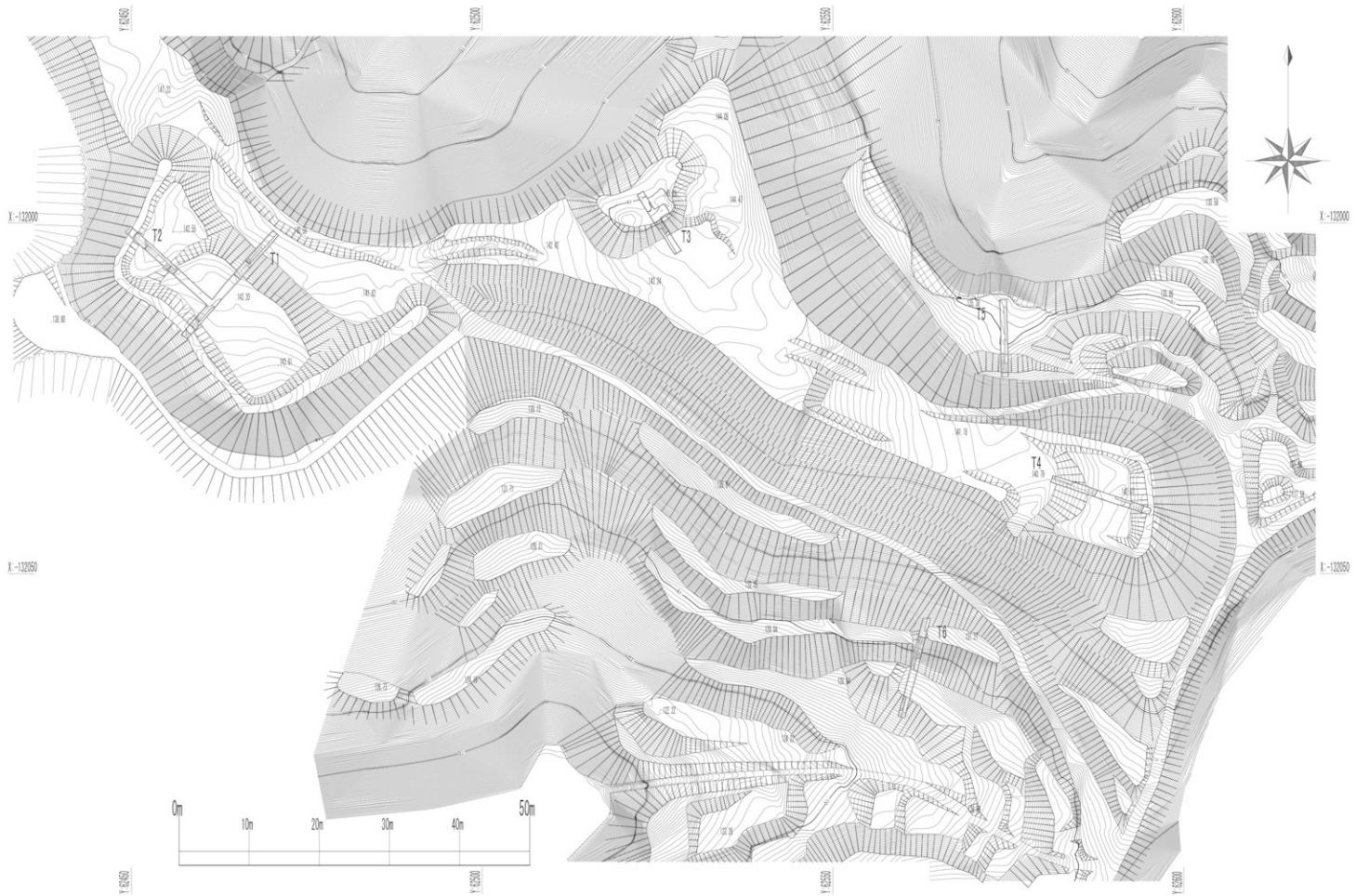


图18 主要部测量图

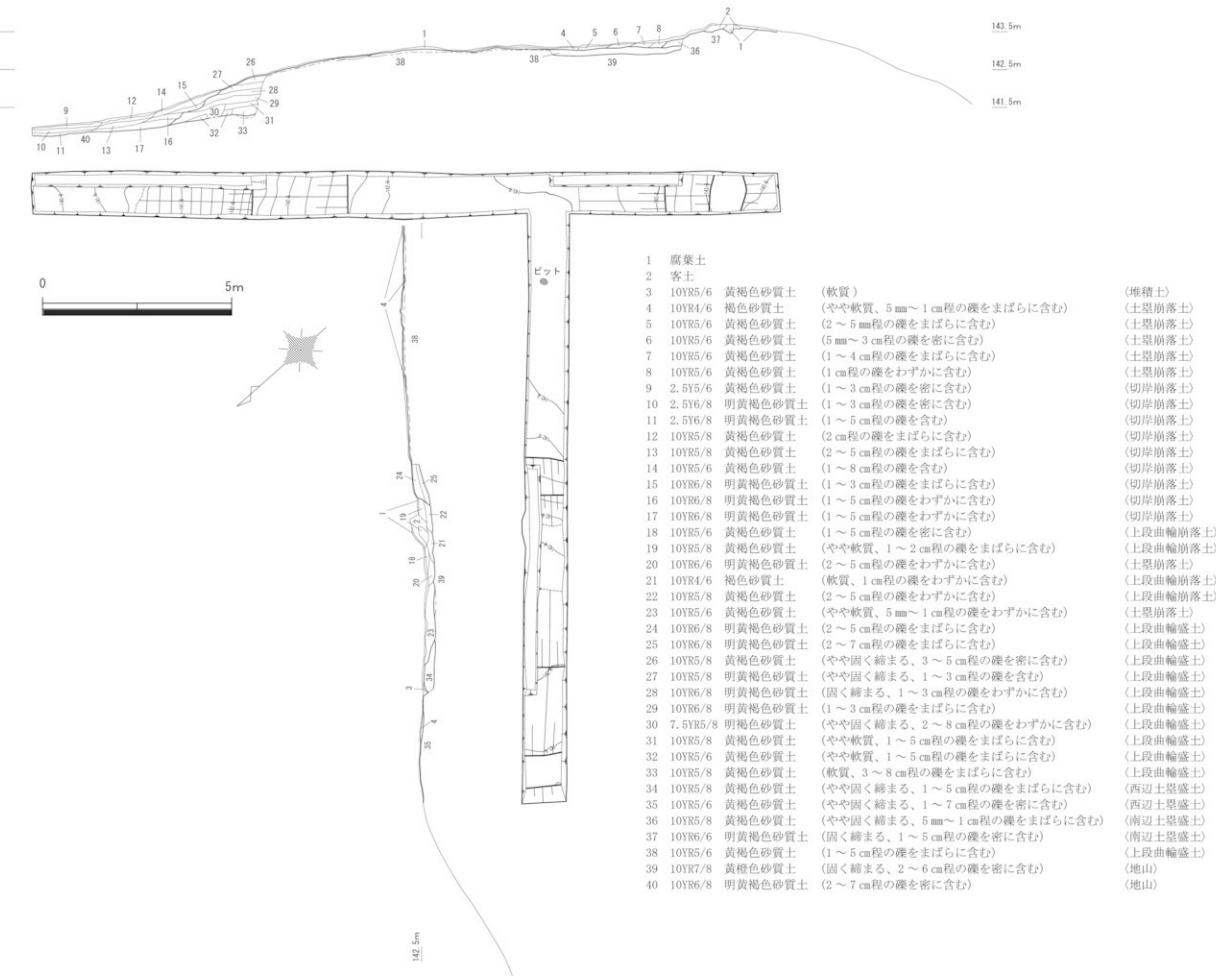


図19 T 1・2 平面・断面図

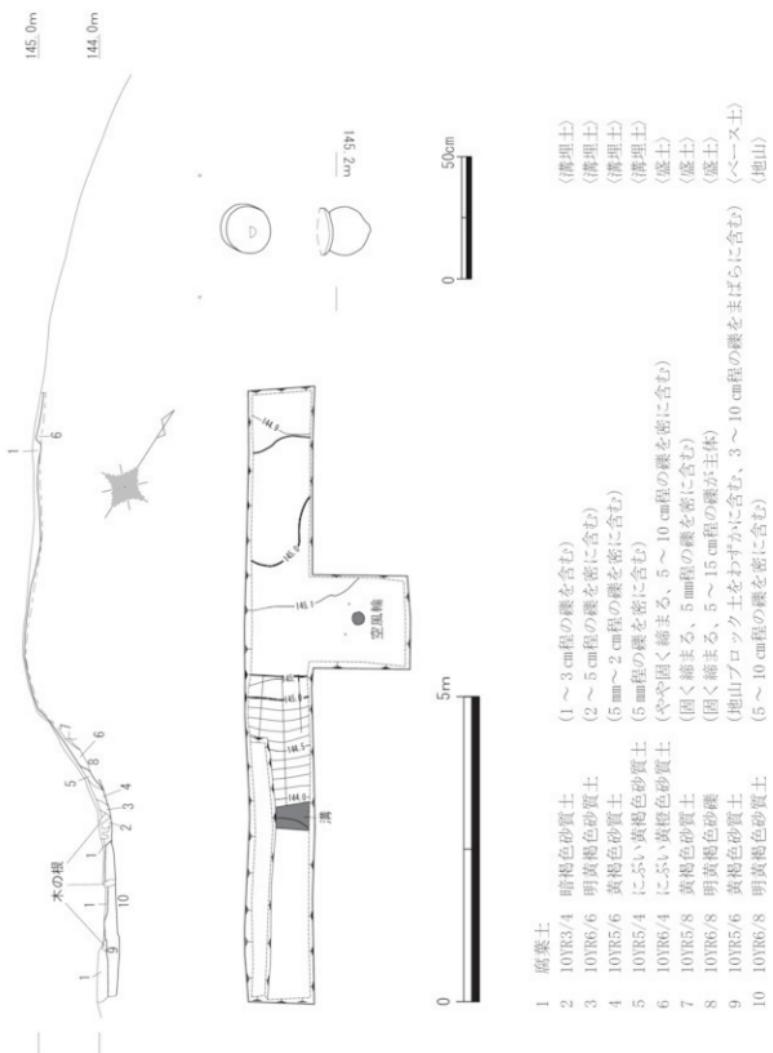


図 20 T 3 平面・断面図

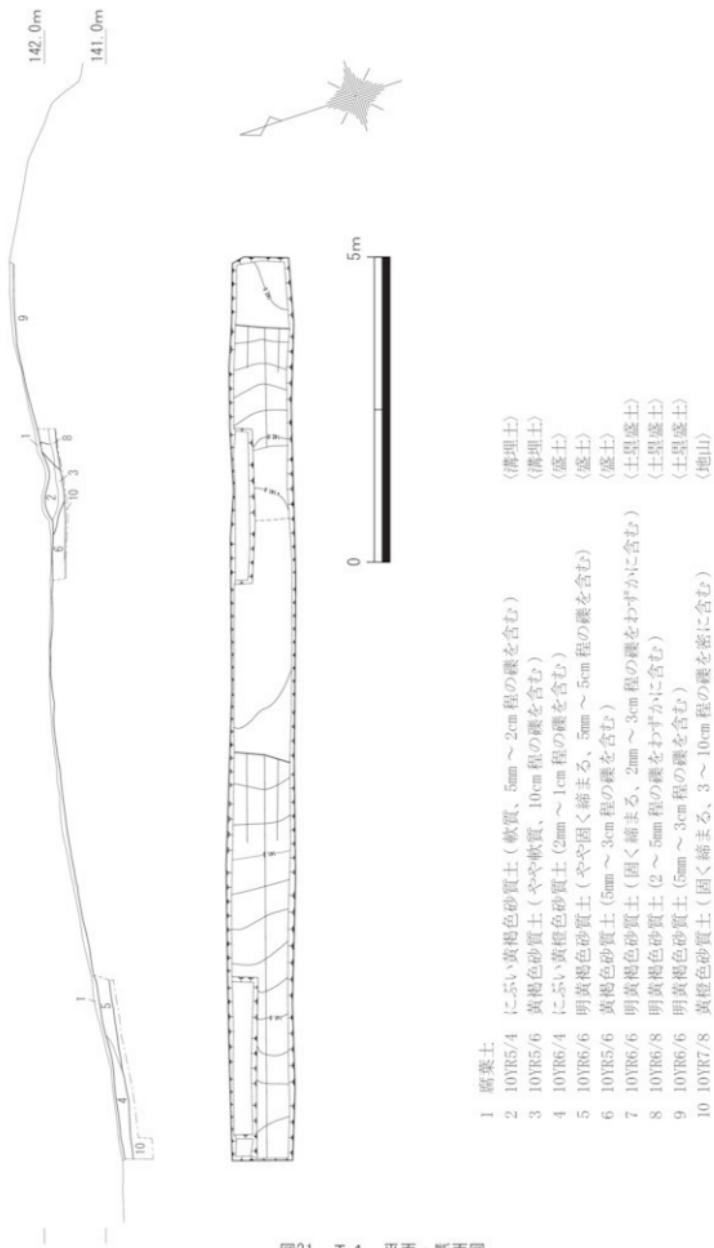
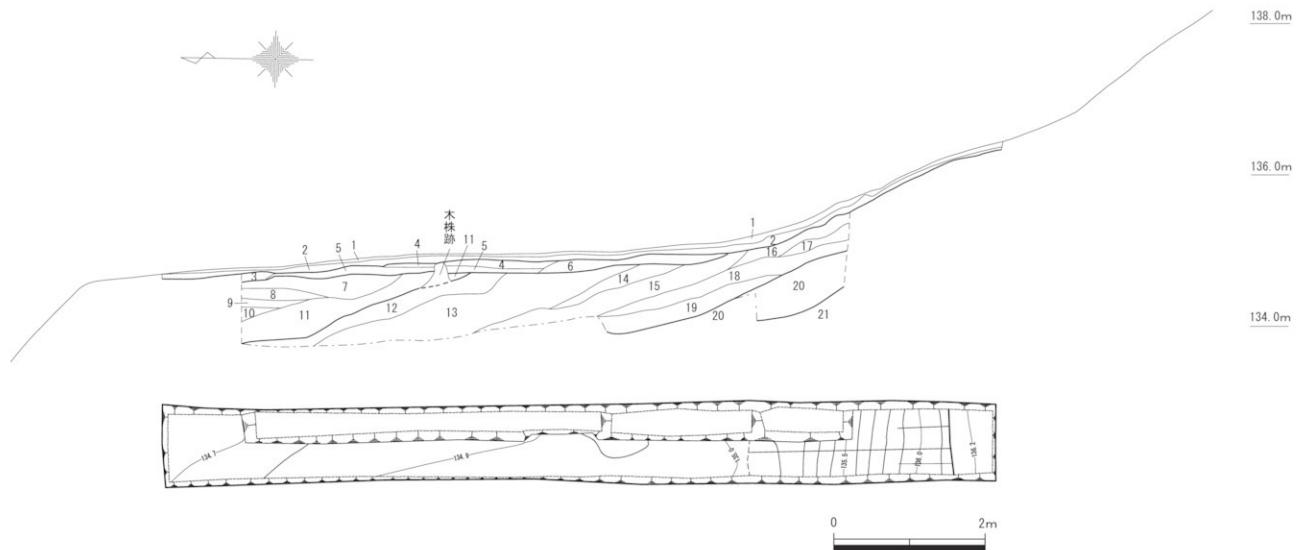


図21 T4 平面・断面図



1	腐葉土	
2	10YR5/3 にふい黄褐色砂質土	(上段法掘から北へ4m程度の付近において5~10cm程の礫を密に含む) (堆積土)
3	10YR5/4 にふい黄褐色砂質土	(盛土)
4	10YR6/6 明黄褐色砂質土	(3~5cm程の礫をまばらに含む) (盛土)
5	10YR7/8 黄褐色砂質土	(1~3cm程の礫をまばらに含む) (盛土)
6	10YR5/8 黄褐色砂質土	(1~3cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
7	10YR4/6 褐色砂質土	(Mn含む、1~3cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
8	10YR5/4 にふい黄褐色砂質土	(Mn含む、1cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
9	10YR4/4 褐色砂質土	(Mn含む) (盛土)
10	10YR5/4 にふい黄褐色砂質土	(Mn含む) (盛土)
11	10YR4/6 褐色砂質土	(Mn含む、1~5cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
12	10YR4/3 にふい黄褐色砂質土	(Mn含む、やや軟質、2~5cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
13	10YR4/6 褐色砂質土	(Mn含む、3~5cm程の礫をまばらに含む) (盛土)
14	10YR5/4 にふい黄褐色砂質土	(Mn含む、1cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
15	10YR5/6 黄褐色砂質土	(Mn含む、3~5cm程の礫をまばらに含む) (盛土)
16	10YR5/8 黄褐色砂質土	(5mm~3cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
17	10YR6/6 明黄褐色砂質土	(1cm程の礫をわずかに含む、底部に炭化物を含む) (盛土)
18	10YR5/6 黄褐色砂質土	(1~3cm程の礫をまばらに含む) (盛土)
19	10YR4/6 褐色砂質土	(1~3cm程の礫をわずかに含む) (盛土)
20	10YR5/4 にふい黄褐色砂礫	(固く縮まる、1~3cm程の礫が主体) (旧堆積土?)
21	10YR7/8 黄橙色砂質土	(Mn含む、固く縮まる、1~10cm程の礫を密に含む) (地山)

図22 T5 平面・断面図

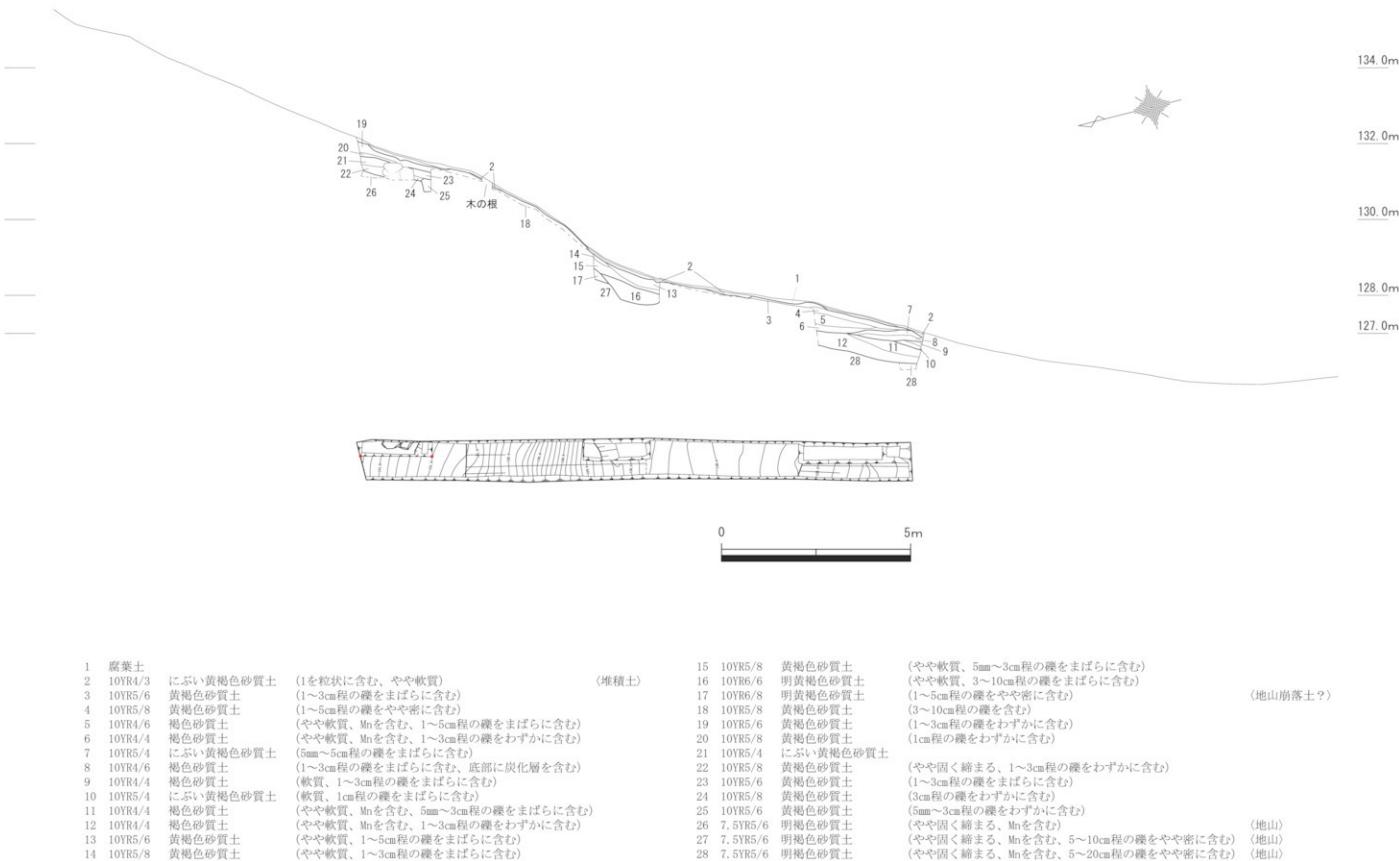


図23 T 6 平面・断面図

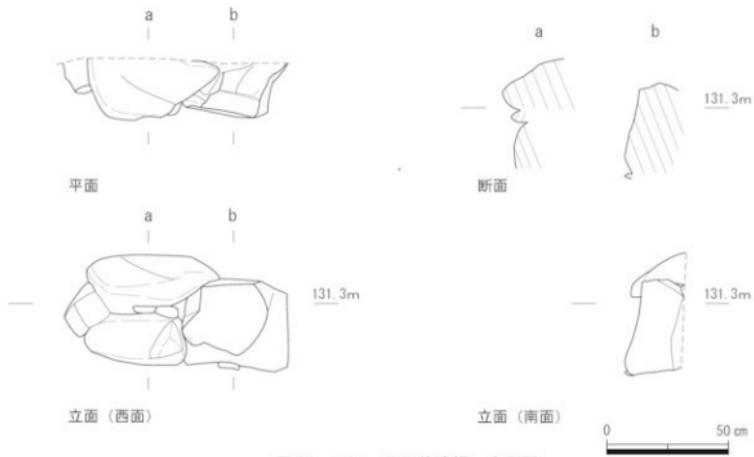


図 24 T 6 石列状遺構 実測図

5 出土遺物 (図 25)

個体として 6 点の遺物が出土し、そのうち 4 点を図化した。残り 2 点は近世以降のものである。細かな出土層位、計測値などは表 4 を参照していただきたい。

T 1

鉄釘 (1) 頭部は欠けており、身部の断面形は四角形を呈する。

T 2

鉄鍋 (2) 2 点出土しており、同一個体と考えられる。口縁部と底部は欠損している。上部において、わずかに銛がみられる。煮炊き用の普及品とみられる。

無釉陶器擂鉢 (3) 体部のみが残存している。内面には 4 条の摺り目が 1 単位みられる。胎土からみて信楽焼の可能性がある。

無釉陶器擂鉢 (4) 体部のみが残存している。内面には 1 単位 5 条の摺り目が 2 単位みられる。胎土からみて信楽焼の可能性がある。

表 4 出土遺物観察表

番号	トレンチ	遺構名	遺物名	器種(部位)	色調	胎土	焼成	法量(cm)(□)は復元値・残存量 口縁(△)は復元値・残存量 厚さ(△)	形態的特徴・調整など
1	T1	主郭上段曲輪北邊盛土痕跡	鉄製品	鉄釘	外面: 7SYRB/4 淡黄褐色			幅(0.7) (0.7) (4.8)	
2	T2	主郭上段曲輪構築面	鉄製品	鉄鍋(体部)	外面: 7SYRS/6 明褐色 内面: 7SYRS/4 にぶい褐色			(12.8) (0.3~0.6) (4.1)	
3	T2	主郭上段曲輪構築面	無釉陶器	擂鉢(体部)	外面: 10RF/6 赤褐色 内面: 2SYR7/6 棕褐色	径 1mm 以下の黒色砂粒、4mm 以下の小石を含む	良	— (0.8) (2.9)	外面: ナデ 内面: 摺り目
4	T2	主郭上段曲輪構築面	無釉陶器	擂鉢(体部)	外面: 10RS/6 赤褐色 内面: SYR7/4 にぶい褐色	径 1mm 以下の黒色砂粒、5mm 以下の小石を含む	良	— (1.1) (4.0)	外面: ナデ 内面: 摺り目

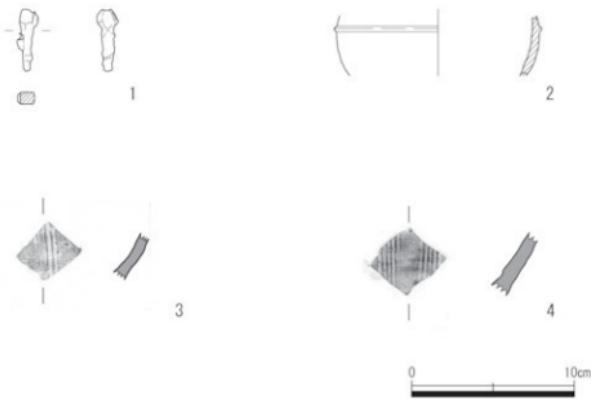


図25 出土遺物 (S=1/3)

6まとめ

今回の調査により、主郭では擂鉢や鉄鍋が出土していることから、煮炊きや調理が行われていたとみられ、鉄釘の出土から建築物が存在していたと考えられる。主郭の造成方法も部分的に判明した。そして、櫓台状の土盛りは、頂部に複数のマウンドがみられ、中世の経塚もしくは墳墓である可能性が高い。付城存続時には櫓台的な利用がなされたとみられる。主要部東端部の土壠が丁寧に盛られていたこと、主要部東側の北側谷部の平坦地では大規模な盛土造成が行われていたこと、推定大手道北側の段状の平坦地群では上段の平坦面において、石列状遺構が存在していたことが明らかとなった。石列状遺構の性格については、調査範囲が限られているため、詳細は明らかにならないが、平坦地南辺の土留めの役割を果たした可能性がある。

なお、櫓台状の土盛りの北東の谷は、地元で「ゴリンダニ」と伝わっており、その麓に創建年代は不明であるが、南北朝期には遡る長福寺という寺がかつて存在し、現在は毘沙門堂が唯一残っている。このことから、当遺構については、元々長福寺に関連するものと見てよかろう。

〈引用文献〉

三木市教育委員会 2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』

付載 三木城跡及び付城跡から出土した動物遺存体

丸山 真史(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

1 動物遺存体の概要

(a) 三木城本丸跡

三木城本丸跡では、動物遺存体は破片数にして 23 点が出土しており、すべて種類を同定した。その内訳は貝類 2 点、爬虫類 1 点、鳥綱 4 点、哺乳綱 18 点である。同定した貝類は全てアカニシ、爬虫類はバタグールガメ科(カメ類)、鳥類はカラス科、サギ科、タンチョウ属(ツル類)、哺乳類はイヌ、イノシシ/ブタ、ニホンジカである。イヌ、イノシシ/ブタ、ニホンジカには、解体痕や肉を削ぎ取った痕跡が見られる。また、イノシシ/ブタは、いずれも幼獣である。

貝類はアカニシ 2 点が出土しており、そのうち 1 点は殻口を打ち割っており、もう 1 点は殻口内部と殻体後部が茶褐色に変色し、被熱した可能性がある。爬虫類は、バタグールガメ科の腹甲板が 1 点出土している。当資料はバタグールガメ科のなかでも、日本に在来の淡水産のイシガメまたはクサガメと考えられる。鳥類は、カラス属、サギ科、タンチョウ属の 3 種が出土している。カラス属の肩甲骨、手根中手骨が 1 点ずつ、計 2 点が出土している。カラス属には、ハシボソガラス、ハシブトガラスが含まれるが、本資料でいずれかを判別することは困難である。サギ科の鳥口骨が 1 点出土しており、大きさはアマサギやチュウサギと同じくらいである。タンチョウ属の脛足根骨が 1 点出土しており、大きさはマナヅルと同じくらいである。哺乳類はイヌ、イノシシ/ブタ、ニホンジカの 3 種が出土している。イヌが 15 点と最も多く出土しており、橈骨と脛骨が 4 点ずつ、中手骨が 3 点、椎骨、肩甲骨、尺骨が 1 点ずつ出土している。15 点中 8 点に解体痕や肉を削ぎ取った痕跡が見られる。また、右脛骨の近位部にはイヌなど肉食動物の咬痕が、右中手骨の遠位部にはネズミの咬痕が見られる。イノシシ/ブタの橈骨、脛骨 1 点、計 2 点が出土している。橈骨は遠位端が、脛骨は近位端が癒合していない幼獣である。橈骨には骨幹部外側に切傷が、骨幹部前位に叩痕が見られる。当資料では、野生のイノシシとそれを家畜化したブタの区別が困難である。ニホンジカの肩甲骨が 1 点出土しており、肩甲峰に刃物が突き刺された傷が見られる。

(b) 三木城二の丸跡

三木城二の丸跡では、動物遺存体は破片数にして 65 点が出土しており、すべて貝類で、破片数にして 98 点、最小個体数では 65 個体である。アカニシが 63 点と最も多く出土しており、このほかハイガイ 1 点、イタボガキ科 1 点が出土している。

アカニシの多くは殻軸のみが遺存しており、その大部分は殻体を打ち割ったと考えられる。大きさは、いずれも殻長 10cm 前後の大きな個体と推測される。ハイガイは左殻で、殻高 26.5mm、殻長 31.2mm を測る。イタボガキ科は右殻で、マガキと思われるが断定できない。

(c) 君ヶ峰城跡

君ヶ峰城跡では、動物遺存体は破片数にして 3 点であり、そのうち 2 点はアカニシの殻軸、他の 1 点はアカニシと思われる殻体が出土している。アカニシの殻軸のみで全体の大きさを求ることはできないが、殻軸の太さから殻長 10cm 前後はある個体と推測される。

(d) 本町滑原遺跡

本町滑原遺跡では、アカニシが1点出土している。大きさは、124.1mm以上の大きな個体である。

(e) 八幡谷ノ上明石道付城跡

八幡谷ノ上明石道付城跡では、アカニシが1点出土している。大きさは125.0mm以上の大きな個体である。

2 三木城跡及び付城跡における動物利用

(a) 貝類利用

貝類ではアカニシが大部分を占めることが注目される。三木城二の丸跡では、ハイガイ、イタボガキ科が1点ずつ出土しているが、その他はすべてアカニシである。また、兵庫県教育委員会の和田村四合谷村ノロ付城跡（吉田住吉山遺跡）の発掘調査では、南北朝期の土壘、堀切、曲輪においてアカニシ1種が出土している。

全国的に中世遺跡から貝類遺存体が出土しており、そのなかでも都市・城館遺跡ではアワビ、ザザエ、アカニンといった大型巻貝の出土が特徴的である（樋泉 2001）。鎌倉市街地の遺跡ではアカニシが大量に出土しており、ほとんどの殻は肉を取り出すために割られている（金子 1988）。広島県草戸千軒町遺跡ではアカガイ、アサリ、ハマグリ、アカニシなどが出土しており、大量のアカニシが投棄された井戸が検出され、ほとんどの殻が割られていることから、近辺でアカニシの剥き身作業が行われたと推定されている（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995）。福岡県博多遺跡では、アカニシが出土しているほか、マガキを含むイタボガキ科が多いことを特徴としており、マガキの集積土坑が検出されている（富岡・屋山 2008）。京都の平安京左京三条二坊十町跡では貝類の出土量は少ないが、室町時代の井戸からアカニシ、シジミ類、ハマグリといった貝類が出土している（丸山・松井 2008）。福島県河股城跡ではアカニシのみが出土しているが2点と少数に留まる。宮城県瑞巣寺境内遺跡ではアカニシが比較的多いが、アサリが最も多く出土している（金子 2009）。これらの中世遺跡では、東北から北部九州までアカニシを利用しているが、特定の貝種が集積した土坑を除いて、複数種の貝類が出土することが一般的である。これに対して三木城跡及び付城跡から出土した貝類は、アカニシに集中していることが特徴的である。

アカニシは北海道南部から台湾、中国沿岸の水深30m以浅の砂泥底に生息しており、大阪湾から瀬戸内にかけても捕獲できる。当地の環境を考慮するならば、瀬戸内海沿岸の播磨灘沿岸部から搬入された可能性が高い。現代でもアカニシを食用とするが、一般家庭の食卓にのぼる機会は少ない。アカニシの利用法は肉を食用とする以外に、容器や鉢壺のほか、染料として利用される。また、江戸時代の本草書である『和漢三才図会』に「蓼螺（あき）」という名称でアカニシについての記載があり、「赤辛螺 殻内外正紅其殻燒灰入薑傳瘡腫玆或作薑鹽其法取辛螺殼鹽燒于炭火上采蘗薑汁頻頗加入能燒調去火氣碎末塗牙齒甚佳含口洗目亦可」と記載される（和漢三才図会 1970）。「アカニシの殻の内外は赤く、焼いて灰にしてから、薑を入れて腫瘍に使う。あるいは薑塩を作る。殻をとって塩を盛り、炭火の上で焼いて、薑薑（はこべ）の汁を絶え間なく加えて火氣をとり、粉末にすると歯牙に効果がある。口に含むのも、目を洗うのにも使える。」と解釈される。さらに香料の研究において、香料は多種多様

であるが、各種の香料を適量配剤調合して用いることを中国では合香とよび、この合香の配剤として甲香（日本では主にアカニシの蓋をすり潰したもの）を調合すると、「香」の匂いが良くなるという（山田 1976）。

前述のように、三木城二の丸跡を中心として出土したアカニシの大部分は殻軸だけが遺存しており、殻体が残っていても殻口や殻体が打ち割られている。アカニシを生食する際、殻口付近を打ち割りながら蓋を取り、貝柱を切って肉を取り出す。当資料には、殻口から殻体後部へ向かって螺旋状に打ち割ったものが含まれており、肉を取り出したことを示している。また、染料として利用する場合も、原料となるバーブル腺を取り出すために殻体を打ち割る。一方、加熱すれば殻を割ることなく、肉を取り出せる。本資料に殻が打ち割られたものが多くあることを考えると、食用か染料としてアカニシを用いたと考えられる。しかし、城内や付城において染色を行っていたとは考えにくく、食用としたと考えるのが自然であろう。また、三木城本丸跡では殻口内面と殻体後部が被熱している可能性があるものが1点出土しており、これは殻口を上向きにして、壺焼きのようにしたことを示唆する。

（b）鳥獣類利用

三木城本丸跡では、貝類以外に食料残滓と考えられる鳥獣類が出土している。特にイヌの骨には、解体痕や肉を削ぎ取った痕跡が多く見られる。戦国期の動物遺存体は、河股城跡（福島県）、沓掛城址（愛知県）、志知・南浦遺跡（三重県）、宮内堀脇遺跡（兵庫県）、大友府内遺跡（大分県）などで出土している。武家に関連する遺跡でイヌが出土する頻度は高く、沓掛城址、宮内堀脇遺跡、大友府内遺跡では、イヌを食用にしていたことが明らかになっている（茂原 1985、丸山・松井 2009・丸山・松井 2008）。このように戦国期の武家における犬食は、珍しくなかったと考えられる。一方、草戸千軒町遺跡では、室町時代を中心とする遺構からイヌが多量に出土しており、解体され食用とされたことが知られる（茂原・松井 1995）。このことから、武家だけでなく民衆もまた、犬食を行っていたことが明らかである。

イヌのほかにイノシシ/ブタやニホンジカが出土しており、いずれの種類にも解体痕が見られることから食料となったと考えられる。また、鳥類ではサギ科、タンチョウ属、カラス属の3種が出土している。いずれも解体痕など見られないが、カラス属を除いて食用となった可能性がある。特に中世では、鳥類のなかで「鶴の庖丁」が第一とされており、上流階級の食事に供されたと推測される。サギ科とカラス属は現代では食用とすることはないが、サギ科は、中世の『尺素往来』の美物に上げられることや、江戸時代の料理本に食材としてあげられることから、一般的な食材であったと考えられよう。一方、カラス属は、中世遺跡からの出土は珍しくないが、食料であったかどうかは明らかでない場合が多い。当資料もまた、出土量は少なく、解体痕もないことから食料と断定することは難しい。また、カメ類も、出土量が少なく食料であったかどうか定かではないが、寛永20（1643）年に刊行された料理書の『料理物語』に「真亀 すひ物、刺身、いしがめも同」と記載され（吉井 1978）、食用になった可能性もある。

『別所記』との関連 天正8年、織田信長の命を受け出陣した羽柴秀吉は、三木城に籠城した別所長治一族を、3年にもわたる戦いの末、「三木の干殺し」と呼ばれる兵糧攻めによって陥落させた。この戦いを別所側から描いた軍記の『別所記』に、兵糧攻めにされていた時の

状況を「犬鼠鷦雉は申すに及ばず、ウマなぞを殺し食と為し」と表現される。また、『三木合戦軍図』にも、犬、馬、鼠を解体する場面が描かれている。今回、三木城本丸跡から出土した動物遺存体には、食料となったイヌが出土している。しかし、ウマ、ネズミ、ニワトリ、キジの出土ではなく、その他のイノシシ/ブタ、ニホンジカ、カラス属、サギ科、タンチョウ属が出土している。これら出土した動物種は、いずれも中世あるいは近世の遺跡から出土する種類ばかりであり、一般的な中世の食料残滓と解釈することができる。ただし、鳥類ではニワトリを含むキジ科やカモ科といった、ごく一般的に食料となる種類が出土しておらず、戦闘時の食料として入手できたものを消費したということも否定できない。

3まとめ

三木城跡及び付城跡から出土した動物遺存体は、貝類を主体としており、その大部分はアカニシである。中世遺跡でアカニシが出土することは珍しくないが、アカニシ1種が集中的に出土することは三木城跡と付城跡群の特徴である。哺乳類や鳥類は、イヌ、イノシシ/ブタ、ニホンジカ、サギ科、カラス属、タンチョウ属が、それに爬虫類のバタグールガメ科が加わり、これらの大部分が食料残滓と考えられる。三木城本丸跡から出土している哺乳類や鳥類は、中・近世の遺跡から出土する種類ばかりで、中世の一般的な食料残滓と考えられるが、発掘調査区が狭く、回収された資料は実際に投棄された動物遺存体の一部に留まる可能性があり、三木城周辺を含めた今後の調査の結果と併せて考えていかなければならない。

〈参考文献〉

- 金子浩昌 1988 「中世遺跡における動物遺体」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会 pp. 407-436
- 金子浩昌 2009 「瑞巣寺境内遺跡の動物遺体」『瑞巣寺境内遺跡』(宗) 瑞巣寺 pp. 147-181
- 茂原信生 1985 「査掛城址出土の犬骨について」『査掛城址第四次発掘調査報告書』豊明市教育委員会 pp. 15-23
- 茂原信生・松井章 1995 「草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 pp. 289-312
- 樋泉岳二 2001 「食物」『日本の中世遺跡』小野正敏編 東京大学出版会 pp. 162-163
- 富岡直人・星山洋 2008 「人と動物の関わりを博多遺跡群に探る」『市史研究ふくおか』第3号 福岡市博物館市史編さん室 pp. 151(8)-132(27)
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 丸山真史・松井章 2008 「動物遺存体について」『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 pp. 146-155
- 丸山真史・松井章 2008 「大友城下町跡から出土した動物遺存体」『豊後府内8』大分県教育庁埋蔵文化財センター pp. 259-271
- 丸山真史・松井章 2009 「宮内堀脇遺跡から出土した動物遺存体」『宮内堀脇遺跡I-町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(此隅山城下遺跡の発掘調査報告)』兵庫県文化財調査報告第365冊 兵庫県教育委員会 pp. 103-121

山崎京美 2002 「河股城跡 I・IIa 区出土動物遺存体の同定」『川股城跡発掘調査報告書-国道 114 号川俣バイパス工事関連発掘調査-』第 4 分冊福島県県北建設・福島県伊達郡川俣町教育委員会 pp1-6

山田憲太郎 1976 『東亜香料史研究』中央公論美術出版 pp. 168-218

吉井始子 1978 『翻刻江戸時代料理本集成』第一巻 臨川書店

和漢三才圖會刊行委員会 1970 『和漢三才圖會』上 東京美術

表5 三木城本丸跡集計表

大分類	小分類	部位	左	右	-	計
腹足綱	アカニシ	-		2	2	
爬虫綱	バタグールガメ科	腹甲板	1		1	
爬虫綱	計				1	
鳥綱	カラス科	肩甲骨	1		1	
		手根中手骨	1		1	
	サギ科	鳥口骨		1	1	
	タンチョウ属	足根中足骨	1		1	
鳥綱	計				4	
哺乳綱	イヌ	肩甲骨	1		1	
		尺骨		1	1	
		中手骨	2	1	3	
		椎骨		1	1	
		極骨	2	2	4	
		脛骨	3	1	4	
	イノシシ/ブタ	腓骨	1		1	
		橈骨		1	1	
	ニホンジカ	肩甲骨		1	1	
哺乳綱	計			18		
	計				23	

表6 三木城二の丸跡集計表

大分類	小分類	部位	左	右	-	計
斧足綱	イタボガキ科	殻体	1		1	
	ハイガイ	殻体	1		1	
腹足綱	アカニシ				63	63
	計					65

表7 三木城跡・付城跡出土動物遺存体

動物遺存体種名表（三木城跡及び付城跡群）

軟体動物門 Mollusca

腹足綱 Gastropoda

新腹足目 Neogastropoda

アッキガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

斧足綱 Bivalvia

フネガイ目 Arcoida

フネガイ科 Arcidae

ハイガイ *Tegillarca granosa*

カキ目 Ostreoidae

イタボガキ科 Ostreidae

イタボガキ科の一種 Ostreidae gen. et sp. indet.

爬虫綱 Reptilia

カメ目 Chlonia

バタグールガメ科 Geoemydidae

バタグールガメ科一種 Geoemydidae gen. et sp. indet.

鳥綱 Aves

ツル目 Gruiformes

ツル科 Gruidae

タンチョウ属の一種 *Grus* sp.

スズメ目 Passeriformes

カラス科 Corvidae

カラス属の一種 *corvus* sp.

コウノトリ目 Ciconiformes

サギ科 Ardidae

サギ科の一種 Ardeidae gen. et sp. indet.

哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ/ブタ *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

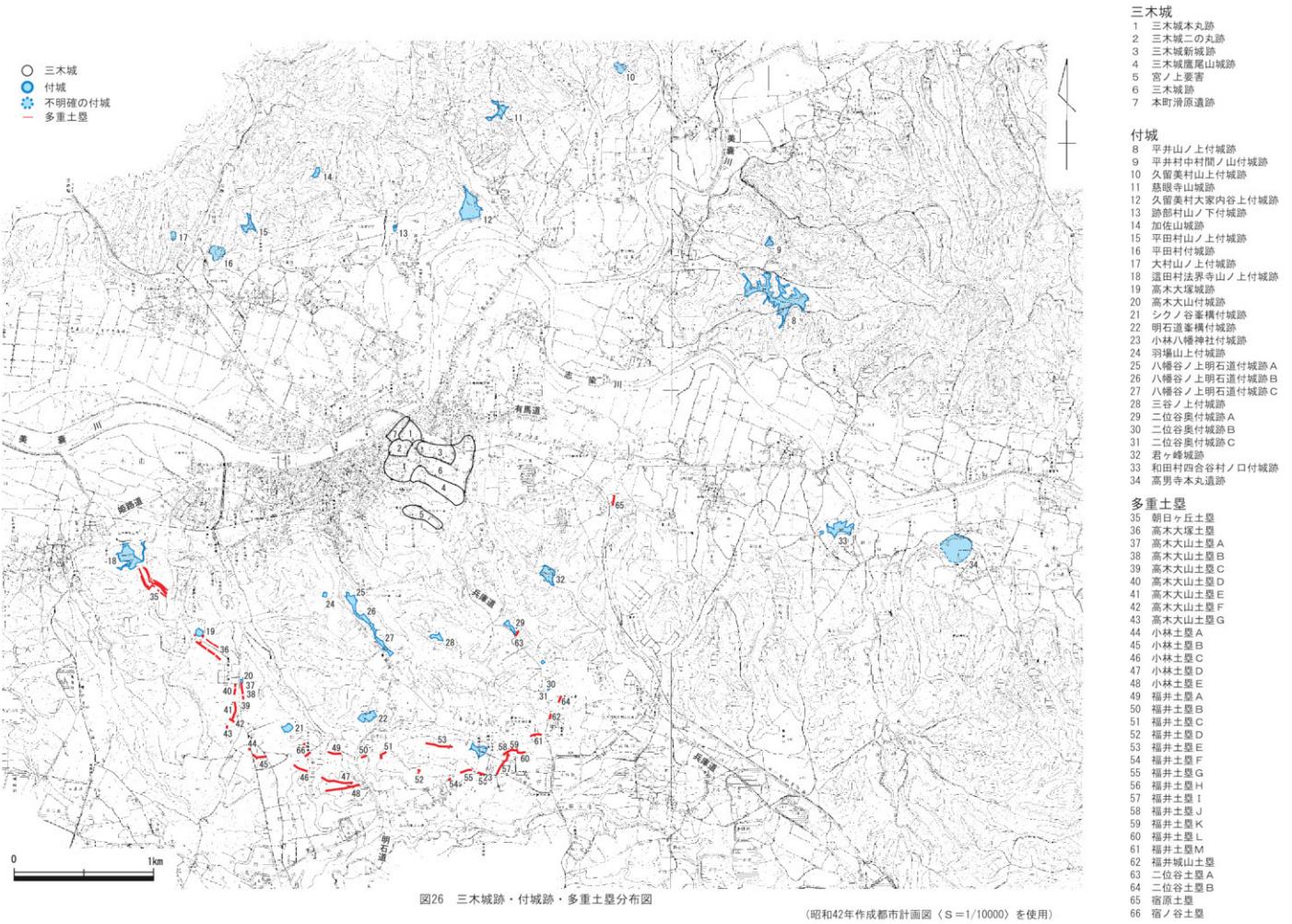


図 版



遠景（西から）



T 1 全景（南から）



T 1 全景（北から）



T 1 主郭北辺土塁
検出状況
(南から)



T 1 主郭北辺土塁
土層断面
(東から)



T 1 北側
土層断面
(南東から)



T2 全景(西から)



T2 全景(東から)



T2 溝検出状況(南から)



T3 全景（北西から）



T3 全景（南東から）



T3 盛土土層断面（南から）



T 4 全景
(南東から)



T 4 土層断面
(北から)



T 4
南側土層断面
(北東から)



宿原城跡 空中写真（上が北 昭和38年国土地理院撮影 MKK634-C15-6）



T 1 捜削作業風景（北西から）



T 1 検出状況（北から）



T 1 断ち割り状況（北から）



T 1 検出状況（南から）



T 1 断ち割り状況（南から）



T 1 南端
堀立ち上がり
(西から)



土壘状遺構
全景
(南東から)



T 2
調査前
(南から)



T 2 検出状況（西から）



T 2 完掘状況（西から）



T 2 東端 断ち割り状況（南から）



志染川越しに平井山ノ上付城跡を望む（南西から）



T 1 全景（南西から）



T 1 全景（北東から）



T 1 土壘裾部
土層断面
(北から)



T 1 土壘裾部
土層断面
(北西から)



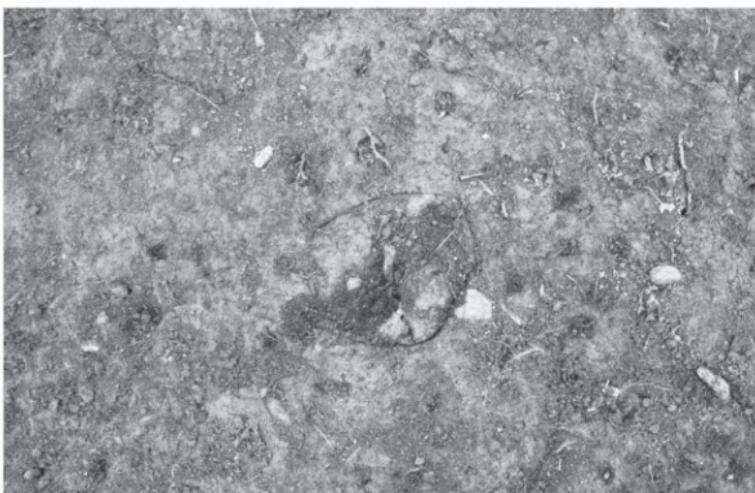
T 1 北側断ち割り
土層断面
(北から)



T 2 全景（北西から）



T 2 全景（南東から）



T 2 ピット検出状況（北東から）



T 2 断ち割り土層断面（南から）



T 2 土塁裾部断ち割り土層断面（南西から）



T 3 調査前（南東から）



T 3 全景（南東から）



T 3 全景（北西から）



T 3 五輪塔空風輪
検出状況
(南西から)



T 3 補部断ち割り
土層断面
(北から)



T 3 補部断ち割り
土層断面
(北東から)



T 4 全景（西から）



T 4 全景（東から）



T 4 土壘裾部溝検出状況（西から）



T 4 土塁裾部溝断ち割り土層断面（南から）



T 4 西側断ち割り土層断面（南西から）



T 5 全景（南から）



T 5 全景（北から）



T 5 断ち割り南端部土層断面（西から）



T 5 断ち割り北端部土層断面（西から）



T 6 全景（南から）



T 6 断ち割り後全景（北から）



T 6 断ち割り後全景（南から）



T 6 石列状遺構検出状況（南から）



T 6 石列状遺構検出状況（東から）

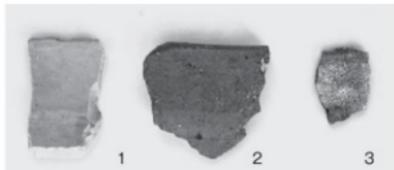


T 6 中央断ち割り土層断面（南西から）



T 6 南端断ち割り土層断面（北西から）

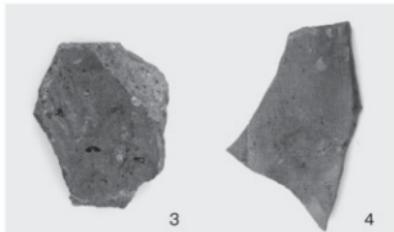
跡部村山ノ下付城跡



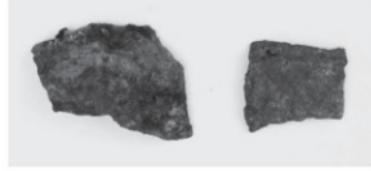
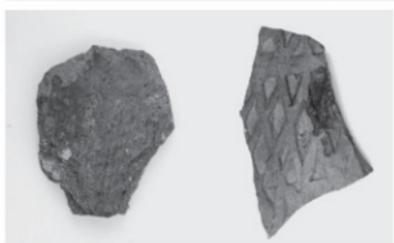
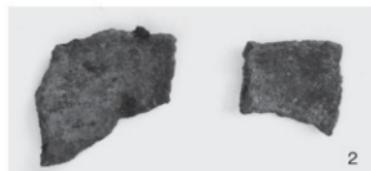
宿原城跡



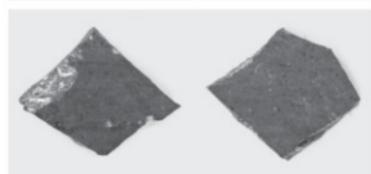
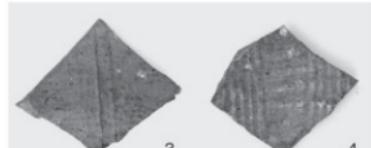
宿原城跡

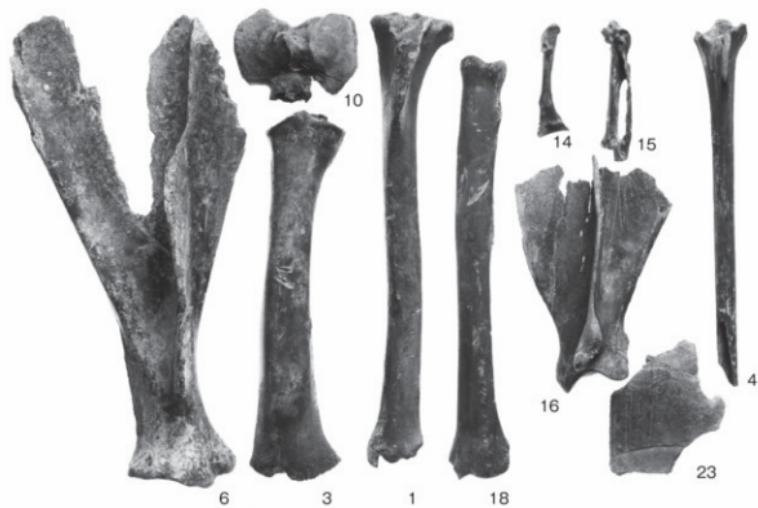


平井山ノ上付城跡

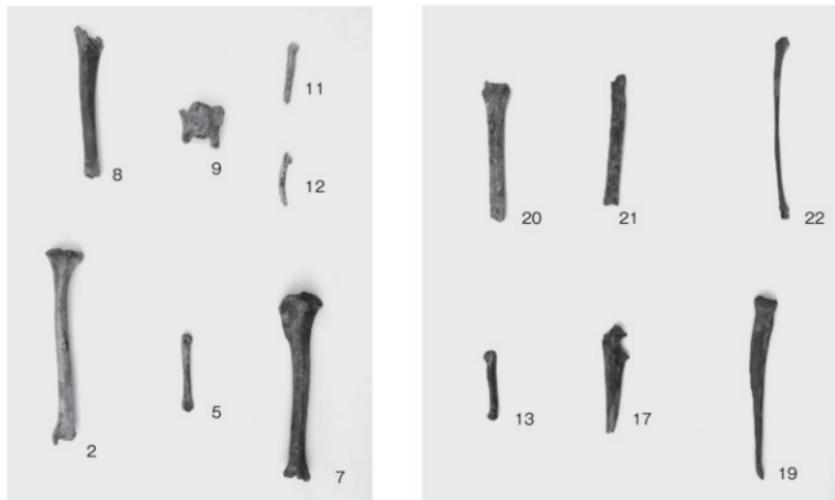


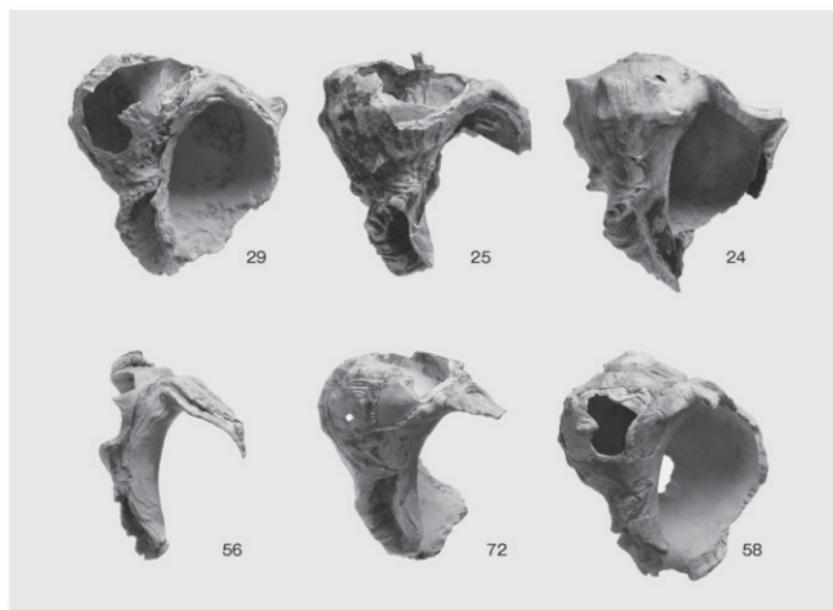
平井山ノ上付城跡



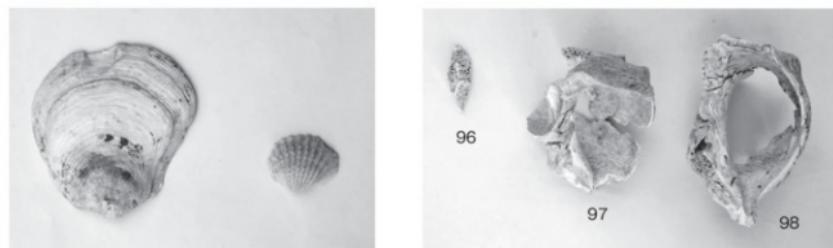
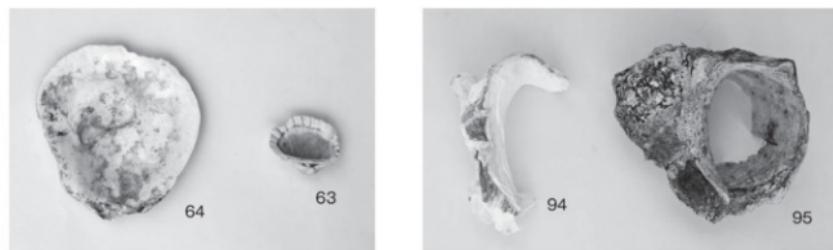


丸山真史氏撮影





丸山真史氏撮影



報告書抄録

ふりがな	みきしへいにじゅうよんからにじゅうろくんねんどこっこほじょじぎょうによるはつくつちょうさほうこくしょ
書名	三木市平成24~26年度国庫補助事業による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	三木市文化研究資料
シリーズ番号	第29集
編著者名	金松誠・丸山真史
編集機関	三木市教育委員会
所在地	〒673-0492 三木市上の丸町10番30号 TEL0794-82-2000
発行年月日	平成27年(西暦2015)3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
防部村山ノ下付城跡	三木市防部字裏山ノ谷287-1、宇裏山289・289-3・289-13・289-14・289-17	28215	160470	34° 48' 46"	134° 59' 12"	2013.2.18~ 2013.3.12	47m ²	重要遺跡範囲確認調査
宿原城跡	三木市宿原1038-2・1038-4	28215	160592	34° 47' 57"	135° 00' 06"	2013.12.12~ 2014.1.6	28m ²	駐車場造成工事
平井山ノ上付城跡	三木市平井字丸山361-4・361-5、与呂木字見谷 684-43 平井字丸山361-23、与呂木字見谷南685-3・685-82	28215	160655	34° 48' 29"	135° 00' 58"	2014.2.25~ 2014.3.31 2014.11.27~ 2015.1.5	47m ² 41m ²	史跡内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
防部村山ノ下付城跡	城館跡	戦国時代	堀、土塁、落ち込み	須恵器、土師器・瓦、磁器	
宿原城跡	城館跡	戦国時代	堀	須恵器、土師器・瓦、陶磁器	
平井山ノ上付城跡	城館跡	戦国時代	土塁、石列状遺構	鉄製品、陶磁器	

三木市文化研究資料 第29集

三木市

平成24～26年度国庫補助事業
による発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集・発行 三木市教育委員会

〒673-0492

兵庫県三木市上の丸町10番30号

印 刷 櫻前田精版印刷所